Naruhodo the Lebanon

ナルホド.ザ.レバノン

古代フェニキア再発見の旅

世界最大幻のローマ遺跡バールベック

アルファベット発祥の地ビブロス

貝紫幻想ティール•シドン

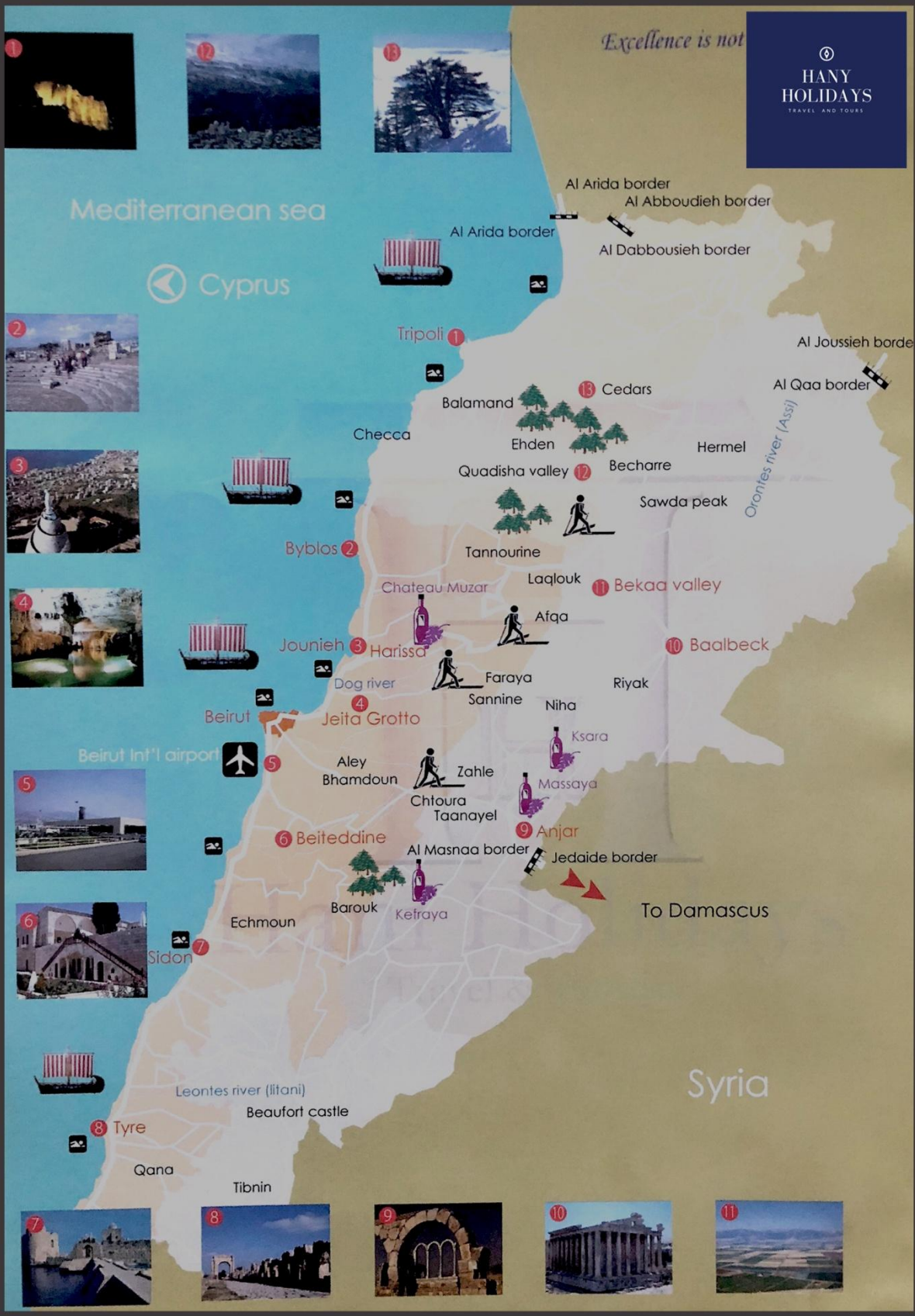
アラブ圏随一の美味レバノン料理

樹齢2000年レバノン人の誇りシーダーズ

現存するレバノン杉が人類史に登場するのは5000年前にメソポタミア地方で書かれた人類最初の叙事詩"ギルガメッシュ"であり、フェニキア人はこのレバノン杉で船を作り交易しおおいに栄えた。紀元前2500年頃には、エジプトのファラオたちは、この香わしい木を聖樹として崇め、宮殿を建設し、棺を作りピラミッドの梁として使用した。

紺碧の地中海でマリン•スポーツ、白銀の世界で
スキーが同時に楽しめる中東唯一の楽園

レバノン へ ようこそ


Excellence is not
HANY HOLIDAYS
TRAVEL AND TOURS
Mediterranean sea
Cyprus
Al Arida border
Al Abboudieh border
Al Arida border
Al Dabbousieh border
Tripoli 1
Al Joussieh borde
Al Qaa border
13 Cedars
Balamand
Checca
Ehden
Hermel
Orontes river (Assi)
Quadisha valley 12
Becharre
Sawda peak
Byblos 2
Tannourine
Laqlouk
11 Bekaa valley
Chateau Muzar
Afqa
Jounieh 3
Harissa
10 Baalbeck
Dog river
Faraya
Sannine
Riyak
Niha
Beirut
4 Jeita Grotto
Ksara
Beirut Int'l airport 5
Aley
Bhamdoun
Zahle
Massaya
Chtoura
Taanayel
9 Anjar
6 Beiteddine
Al Masnaa border
Jedaide border
Barouk
Kefraya
To Damascus
Echmoun
Sidon 7
Syria
Leontes river (litani)
Beaufort castle
8 Tyre
Qana
Tibnin

レバノン紹介

国土の自然の豊かさ、気候の温暖さにおいて、他の中東諸国の追随を許さないレバノンは「中東のスイス」と呼ばれ、アラブ諸国の中で唯一不毛の砂漠を有さない国として、欧州並びに湾岸をはじめ近隣諸国から多くの観光客、避暑客を魅きつけてきた。「レバノンでは午前に水泳を、午後には雪山でスキーを楽しもう」という言葉をよく耳にするが、まさに、これがレバノンの醍醐味であり、シーズンともなればリゾート地へ向かう人々で国中が活気づくのだ。

レバノンはまた、商業の気性に富み、かつて海上貿易で栄えたフェニキア人の拠点があったことでも有名である。東西の貿易の中継点として、又、中東地域の金融センターとして繁栄を築いてきたレバノンは、3つの大陸の合流点として、何世紀もの間、多くの侵略者の攻撃を受けてきた。また、彼等の残した痕跡は、貴重な文化遺産として今なおその息吹きを感じさせる。

美しいバールベックやティールの町を築いたのはローマ人である。また十字軍もトリポリの砦に代表される城を幾つか築いている。十字軍は自分達の前哨地として、廃墟となった都市を好んで選んでいる。というのも廃墟には豊富な石があり、城の建設に便利であったためである。

ベイルートは、現在はレバノンの首都であるが、古代にはベリタスと呼ばれた重要な港町であった。世界初の法律の学校がこの地に建てられ、各方面に大きな影響を与えた。それ以前には、セム語で井戸、港、泉、などを意味するビロットと呼ばれていた時期もある。

紀元前１０００年以降にフェニキア人が築いたシドンやティールといった国家都市が衰え始め、ベリタスは徐々にその影響力を強めていたが、実際文化の中心として重要な役割を果たすようになったのはローマの時代になってからのことである。ローマの後は十字軍が、およそ２００年にわたってベイルートを占領した。

今日、これら数々の文明の痕跡は長年の戦争や、戦後の復興作業によって破壊されてしまったものもあるが、それでもその痕跡を見ることができる。

レバノン政府は、２５年計画で、これら戦争によって破壊されたベイルートの中心地を含む地域の再建復興を推し進めていく予定である。電気、水道といった基礎設備は、１９９８年までに、ほとんどが終了し、ベイルートをモダンながらも東洋の面影を残した都市に変身させることを目指している。殉教者広場や国会議事堂、セライル（トルコ宮殿）といった歴史的建物はふたたび注目の的となることになるだろう。

残念ながら、古いスーク（市場）は取り壊されてしまったが、新しく、昔風にデザインされたスークが、新生ベイルートに再建されることになっている。また、考古学的にも興味深い地域が美しい公園の中に登場することになるだろう。

レバノンは、１７年間も続いた戦争が遠い記憶となり、レバノンを訪れる人達が、美しい自然や国際的な雰囲気、さらには世界に冠たる考古学的遺産を楽しむ日が、近い将来訪れることを切に望んでいるのである。

トリポリ（現在のトラブロス）は、レバノン第二の都市で、ベイルートの北方８５kmに位置し、レバント海岸地域の長い歴史と共に歩んできた町である。シドン、ティール、アラドス島にまたがるフェニキア人国家の中心地であった。また、この三つの都市を意味する言葉、トリポリスがトリポリの語源となっている。聖ジル城（Castle of St.Gi-les)は、フランク王朝によって建てられた城であるが、十字軍当時のものは、アブ・アリー川に面した正面入口だけで、イスラム教徒がトリポリを没落させた時に破壊され、後に再現されたものである。また町に残る古い建物は、イスラム教スンナ派の学校をはじめとして、それぞれの特色を今に伝えている。１５世紀の首長ジュルバンが海岸に建てた「獅子の塔」は、マムルーク朝が、レバノンに残した最高傑作である。

シドン（現在のサイダ）は、ベイルートから４１km離れており、この町はフェニキア第三の国家都市で、当時、ビブロスやティールと海軍の覇権を競っていた。

１２２８年、十字軍によって「海の城」が建てられている。また、もとは十字軍の教会だったため、個性的な構造のグランド・モスクや聖ルイ城、外国商人の宿だったハーン・エッフランジ、エシュムーン神を祭ったフェニキア人の寺院、カタコンベや地下室を備えた古代の埋葬場などは、輝かしい時代の遺物である。また、シドンという名は「釣り」が語源といわれ、今日でも漁師達がこの風光明媚な小さな港にボートを係留している姿や魚市場も見られる。

ティール（現在のスール）は、ベイルート南方７９km、B.C.２７５０年にフェニキア人によって建てられた。B.C.１０世紀頃、ヒラム王は、ここティールからレバノン杉を神殿建設のためにソロモン王に向けて船で送った。

フェニキアのガラス製品の輸出港としても有名である。「フェニキアの緋衣」として称賛された王家の衣類や宗教儀式の衣装に欠かせない貝の一種から採れる紫色を帯びた緋色の染料も、ここから世界中に積み出されたのである。

ティールの人々は旧市街をかこむ城壁の内部に籠もり、当時権勢を誇るネブガドネザル王に１３年間屈しず、アレキサンダー大王もこの海上都市を征服するのに７ヶ月かかったと言う。

侵略、征服の後、現在は高層ビルが立ち並ぶ現代的な街並みだが、港に隣接した旧市街では、ひなびた雰囲気を残す路地を散策し、古い教会や建物を発見することもできる。そして遺跡は必見の価値があるので、是非とも訪れたい。

ジュニエは、ベイルートから１８km離れた国際的リゾートで、北はマーメルティンから南はズークに至る。標高６２０m のハリーサ山の頂上からはマリア像「Our lady of Lebanon」と現代的なキリスト教会が町を見下ろし、ケーブル・カーでそれらを訪れることができる。眼下に拡がる海岸線とジュニエの街は絶景である。水上スキーやダイビング等マリン・スポーツを楽しめ、また娯楽施設も豊富で、ナイト・クラブ、レストラン、ホテルが多数隣立している。また、１９９６年１２月に国営カジノである、カジノ・ドゥ・リボンも新装オープンし、注目を集めている。

ビブロス（聖書ではゲバル、現在はジュベイルと呼ばれる）は、ベイルートより３２km、パレスチナのジェリコ、トルコのチャタル・フュックと並ぶ、世界最古の町の一つである。

７０００年以上前から　人が住み、漁民のコミュニティも存在し、初期宗教の神も石に刻まれた偶像として発見されている。紀元前３０００年の始め、ビブロスは東部地中海において最も重要な木材海上輸送センターとなり、エジプトのデルタ地方にまで杉を輸出していた。またエジプトからは、金やアバラスター、パピルスの巻き物や縄、そして亜麻布が送られてきた。これがビブロスの商業活動の幕明けとなったのだ。また、「ビブロスの女神」バーラット・ジェバラに捧げられた大神殿がB.C.２８００年に、そして、百年後には男神に捧げられた「エル神殿」が建設された。がっしりとした青銅器時代初期の壁もこれら初期宗教への信仰を反映したものとなっている。

その後数々の文明が盛衰を繰り返し、そのために幾重にも滞積した煉瓦の層によって、それぞれの時代が推定できる。

当時の王達はヒエログリフを使用していたが、このやっかいな書体は、商業的記録を残すには適さず、音標文字が開発され、現代のアルファベットの基となったのだ。アルファベットは、フェニキアの商人たちによって、ここビブロスから普及していったのである。古代世界で書物の材料として使われたパピルスのシートを重ねたものが、ビブリオン、そして聖書「バイブル」の語源となったのが、ビブロスであることはよく知られている。

カディーシャ高原は、レバノン北部にある水と緑の豊富な自然のすばらしい所である。断崖にしがみつくように連立しているマロン派の修道院群、中東最長といわれる滝や神秘的な秘境の大自然が見所である。

「予言者」の著者である詩人のハリール・ジブラーンの生まれ故郷、ベシャッリには、彼の遺言により遺体を安置した修道院が博物館として彼の多数の書画を納めている。

レバノン杉の森には、遊歩道がもうけてあり、直接この偉大な杉の芳香を楽しみ散策することができる。ソロモン王の神殿建築のために、ティルス王ヒラムより送られたレバノン杉は、かつてはレバノン全土を覆っていたというが、現在１２００本にまで減少しその三分の一がこの地に残っている。中には樹齢２０００年を越える杉もあり、その雄大な姿と杉の放つ芳香はすばらしく、ソロモン王の宮殿内にあったという「レバノンの森の家」の豪華さが想像される。この２０年間は、ほとんど植林されていなかったが、現在その保護活動が再開された。この杉の森はレバノン最高峰コルネ・エッサウダ(Qurnet cs-Sauda)標高３０９０m の眼下に位置し、シーダース（杉の森）スキーリゾートにも隣接している。また日本の新宿御苑の中にも、レバノン杉を見ることができる。

ザハレは、「ベカーの花嫁」として知られ、ベイルートから５０kmほど離れた美しい街である。レバノン山脈から東に流れ出たバルドウニ川が、ベカー高原に合流する地点に位置する。

ここは穏やかな気候とレバノン最高の様々なメッゼが食べられることで有名である。メッゼはレバノンのどんなレストランに入っても必ず出る前菜料理であるが、ここザハレのメッゼは逸品である。ぶどうの蔓に覆われたレストランで川のせせらぎを聞きながら、レバノン料理を心ゆくまで楽しんでみたい。

ここは穏やかな気候とレバノン最高の様々なメッゼが食べられることで有名である。メッゼはレバノンのどんなレストランに入っても必ず出る前菜料理であるが、ここザハレのメッゼは逸品である。ぶどうの蔓に覆われたレストランで川のせせらぎを聞きながら、レバノン料理を心ゆくまで楽しんでみたい。

バールベックは、何といってもレバノン旅行のハイライトと言っていいであろう。ベイルートの北西８５km、ベカー高原の中心に位置する、この巨大遺跡はローマ時代に大都市として発展した。フェニキア人の豊穣神バール神を祀る神殿にローマ人達も犠牲を捧げた。それは「主神ジュピター」として、ローマ帝国全土で崇拝されるようになった。そしてアウグストゥス帝が始めた大神殿建設は、約１世紀もの間受け継がれた。しかし、その後キリスト教が公認されると、異教の神は退けられたが、しかし、この頑強な神殿を破壊することはできなかった。六角形の中庭、大中庭にそびえる２本の犠牲塔など、他のローマ遺跡には見ることのできないセム族独自の様式を見ることができる。

内戦によって中止されていたバールベックの大神殿で行われる国際的な夏の芸術祭の再開が期待される。

レバノンの歴史

レバントは、ラテン語の「のぼる」という意味の古い言葉で、太陽が東から上ることから地中海の東海岸を指すという。西洋と東洋が出会い、地中海の水がアジアの内陸地に接しているという、まさに地理的要衝の地に位置していたために、この小さな国レバノンは、５０００年の歴史の中でいく度となく侵略を受け、戦争により破壊されてきた。その度重なる破壊のたびごとに、復興回復工事が繰り返され、レバノンは壮大な姿に生まれ変わってきた。何層もの瓦礫が長い歴史を物語るビブロスは、人類が永住都市として築いた世界で最古の都市であると言われている。そしてビブロス同様に、今日のベイルートは最近まで続いた戦争の被害にもかかわらず、高いビルが立ち並ぶ近代都市へと変貌しつつある。レバノン政府が１５０億ドルを計上し２０年計画で復興に励んでいるのだ。新しい歴史の１ページがまた開かれようとしている。

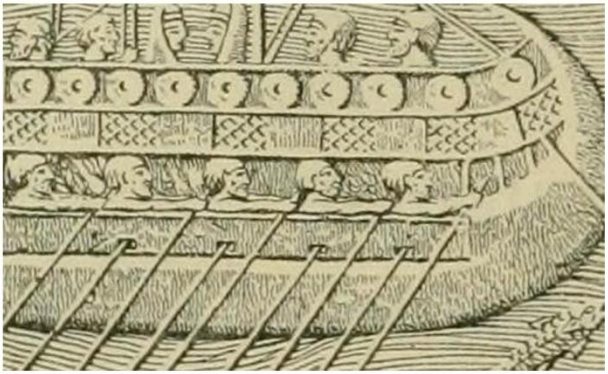
ＢＣ７５００～４０００年
後期石器時代。レバノンを含む中東の肥沃な三日月地帯に、人間が定住。

ＢＣ４０００～３０００年
青銅器時代。イスラエルのジェリコ、レバノンのビブロスに小さな町が生まれる。銅器が使用される。紅海にフェニキア人が現れる。

ＢＣ３０００～１５７０年
フェニキア時代、セム語で「貿易商人」を表すカナニーテに通じる名前カナンリ達は、地中海沿岸に幾つもの独立国家広大な植民地を築きラバン（雪、白を意味するアラム語）という名を国として共有していた。骨貝から採られる紫がかった緋色の染料になぞられて彼等をフェニキア人と呼んだのはギリシャ人だった。この色は王族の色とされ、重要な輸出品であり、染められた布は、エジプトやギリシャ他多くの国々へ送られていた。産地としてシドン、ティールが有名で、この紫がかった緋色は、町の守護神メルカートの象徴でもある。また、ガラス製造を始めたのもフェニキア人だった。当時、使われていたエジプト象形文字を簡略化し、現在使われているアルファベットの原形を使ったことは、１９２９年ビブロスで発見された王族の石棺に書かれていた記号の発見により証明された。多忙な商業活動の中で改良されていったアルファベット（セム語でアルファは牛、ベターは家の意味）は、後にギリシャ人によってヨーロッパに広まった。またこの優れた貿易国はアルファベットばかりでなく収益の記録のため、複式簿記まで発明している。そして、カルタゴに代表される植民地をキプロス、クレタ、ロードスに築き、ついには、西アジアからヨーロッパへの貿易ルートを開いた。なんとポルトガル人より１０００年も先にアフリカをも回っていたのだ。

ＢＣ１５７０年
フェニキアはエジプトに滅ぼされ、次々にアッシリア、バビロニア、ペルシャ、ギリシャの支配を受ける。

ＢＣ６４年
ローマ帝国の属国となる。将軍ポンペイウス統治下、国が繁栄したことはバールベック遺跡からも想像できる。



５７年
聖パウロがティールへ伝道旅行に訪れる。

６３６年
ビザンチン帝国。イスラム教アラブの侵略にあう。

１０９５年
十字軍時代。エルサレム奪還の命により派兵されたフランク王国軍は、繁栄で賑わうレバノンに矛先を向け、ティール、シドン、ベイルート、トリポリを征服。キリスト教国となる。

１２６０年
エジプトのマムルーク朝が十字軍を駆逐、かわって全土を支配する。

１５１６年
オスマントルコがマムルーク朝を追放し、大シリア属州となっていたレバノンは、オスマン帝国に組み込まれる。

１７００年
首長ファハルッディーンがレバノンを統一。

１８４１～１８６０年
オスマン帝国指導者の下、イギリスの支援を受けた南部のドルーズ教徒とフランスの指示を受けたマロン派キリスト教徒が対立し、過酷な税金にあえぐ民衆の貧困と相まって、たくさんの血が流された。

１８６１～１９１５年
レバノン山脈地帯が自治領となる。

1916年
第一次世界大戦時、連合国の意向を受け、オスマン帝国が解体される。

１９２０年
９月１日大レバノン国建設。しかしシリアと共にフランスの委任統治領となる。

１９２６年
共和国建国宣言。レバノン初の憲法は、大統領、首相、国会議長を定めているが、彼等は宗派による勢力の分配によって割合を決めた初の人口調査（１９３２年）により、各宗派のもつ議席に、比例代表制度が適用され、キリスト教徒６に対しイスラム教徒５の人口比であったため、国会議員など全ての役職はこの割合で決められ、大統領もキリスト教徒マロン派から選出された。選挙は行われたが、フランスの絶対権力下でのものだった。

１９４３年
１１月２２日レバノン共和国独立。

１９４６年
フランス軍完全撤退。

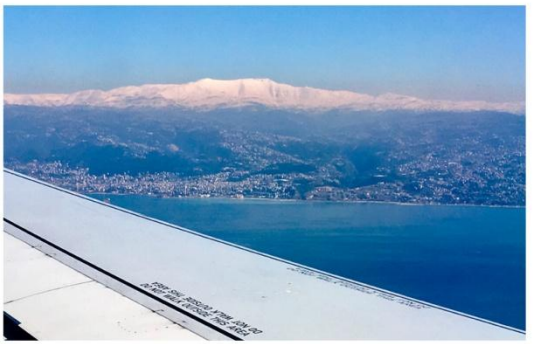
１９４８年
イギリスがパレスチナ統治を断念。イスラエル建国、国際連合の調停にもかかわらず、パレスチナは、イスラエルをユダヤとアラブとに二分する分割法案を拒否しアラブ６ヶ国が独立したばかりのイスラエルに侵入、第一次中東戦争となる。追放された多くのパレスチナ人達が、レバノンに大量に逃げ込んでくる。

１９５６年
第２次中東戦争

１９６７年
第３次中東戦争

１９７３年
第４次中東戦争及び第一次オイル・ショック。

１９７５年
フランス統治下での宗派の勢力に応じて定員を割り当てる比例制度によって、キリスト教徒大多数支配の基盤をつくった１９３２年の人口調査は、その後人口変化が起こったにもかかわらず、修正されることはなかった。イスラム教シーア派は自らを、代表者を出せぬ多数派だと呼び抗議した。レバノン国内では、レバノン南部をイスラエル攻撃の基地として使用するパレスチナ・ゲリラグループを支援するかどうかについて、意見が大きく分かれていた。イスラム教徒は一般的に、神聖アラブの大義を掲げるＰＬＯを全面的に支援し、マロン派キリスト教徒は、レバノンは中立の立場を擁護すべきだとし、ＰＬＯの影響の増大を懸念していた。そうした中で、ゲリラの無制限な活動がレバノンの治安や独立国としての立場に与える影響について憂慮したマロン派は、イスラム教徒の反対にもかかわらず議会での大多数の権力を利用して、国家軍にゲリラ活動を押さえさせようとしたのである。１９７０年代中期のレバノン軍は兵士の多くが自らの宗教グループへ離脱し、ほとんど機能を果たしていなかった。１９７０年代後半には、国の治安を守ることなど望むべくもなかった。



１９８２年

６月、イスラエルが、ロンドン駐在イスラエル大使暗殺未遂の報復としてレバノンに侵攻。この侵攻は、レバノン南部の拠点を失えば、北イスラエルのガラリヤ地区に平和が訪れるであろうということで、「ガラリヤの平和作戦」と称された。このイスラエル軍は、マロン派キリスト教徒の歓迎を受ける。この時ＰＬＯはすでに事実上、最大のイスラム教徒軍となっていたからである。またＰＬＯの軍事的、政治的活動の行き過ぎに辟易していたレバノン南部のシーア派イスラム教徒も同調した。しかしヒズボラ（神の党）といったイスラム教徒の急進主義派の台頭、過激活動を生むこととなった。１９８２年の侵攻の際、イスラエル軍は南レバノンのＰＬＯキャンプを破壊し、シリアの戦闘機を打ち落とし、７０日間にわたってベイルートの市街を爆撃した。レバノンの市民は最悪の被害を被り、推定１７８００人の市民が犠牲になったといわれている（イスラエルは３４４人の兵士を失った）。市民に多数の犠牲者がでたことで、イスラエルは世界中から非難を浴びることとなったのである。アラファト議長も、ついに、ＰＬＯを引き上げることに同意、アメリカが調停をし、アメリカ多国籍軍（ＭＮＦＩ）と西ヨーロッパ軍がベイルートに派遣され、市民の警護に当たることとなった。同９月１４日、新たに選出されたばかりのレバノン大統領バシール・ジェマイエルが暗殺された。彼は、キリスト教徒軍の指導者で、先のイスラエルとの条約を撤回していたのである。２日後、イスラエル軍はキリスト教秘密結社軍がＰＬＯテロリスト残党の検挙のため、サブラシャティーラのパレスチナ・キャンプに入るのを許した。暴徒と化した結社軍は２日間で

８００人にも上る子供を含む男女を無差別に虐殺したのである。バシールの兄アミンが、アメリカのバックアップを受けて大統領に就任する。より強力な多国籍軍がベイルートに配置され、表面的には楽観ムードが流れ始めた。侵攻から一年以上後にイスラエル軍は南レバノンへと撤退し、シューフ山脈地帯に非武装地帯を設けた。この地を求めてキリスト教徒軍とドルーズ派軍が激戦し、多国籍軍の撤退が戦争の終焉をもたらすだろうという希望を打ち砕いたのである。レバノンの治安は悪化の一途をたどり、多国籍軍は撤退した。シリア軍だけが残ったが、宗教勢力間の衝突は後を絶たず、平和の試みは全て消え去ったのである。

１９８７年

２月、ドルーズ派とシーア派の間にまた新たな衝突が起こり、西ベイルートのほとんどが炎上した。この時はシリア軍がベイルートに平静を取り戻したのだが、以後長期にわたってシリア軍が駐留することとなった。

１９８８年～１９９２年

１９８８年大統領アミン・ジュマイエルの任期が切れ、続いて陸軍総長ミッシェール・アウン将軍が軍事政権の暫定的首相に任命されている。イスラム教徒側はホス首相代行首班の内閣を正当とし対立し、このためベイルートに二つの敵対する政府が同時に存在することとなった。翌、春、アウン将軍はシリア軍に対し「解放戦争」を宣言。シリア軍の駐在する西ベイルートを無差別攻撃した。このためアラブサミット緊急会議がカサブランカで開かれ、９月、アラブ連盟主導の「国家調停文書」が、サウジアラビアのタイフでレバノン側により調印されている。大統領にルネ・モアッワドが選出されたが、１７日後に暗殺され、代わりにマロン派キリスト教徒の穏健派でシリアとの関係もいいエリアス・ハラウィが選ばれた。１９９１年後半までにレバノン軍はシリアの支援をうけて、ベイルートを掌握しその影響を全土に及ぼした。しかし現在も何千人ものシリア軍が駐留している。

１９９２年

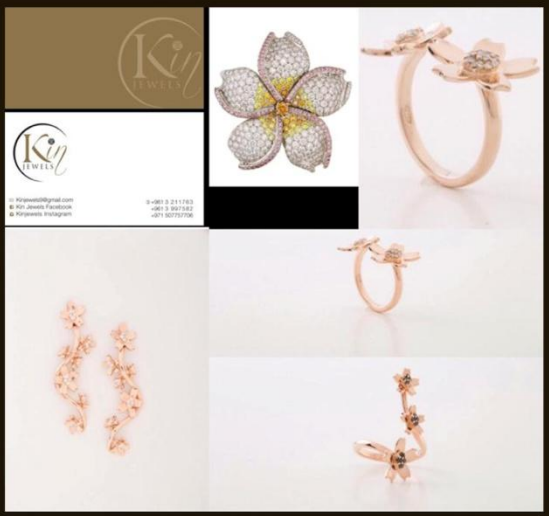
１９９２年８月、２０年ぶりの国会議員の選挙が行われ、ヒズボラはレバノンシーア派の最も主要な代表団体となった。１９９２年後半、億万長者の企業家、ラフィーク・ハリリが首相に任命された。彼はサウジアラビアで財をなした。今日のベイルート再建復興事業の立て役者である。平和が国の大部分によみがえった。

キン・ジュエルズは、貴方のご希望にそって作り上げた完成度が高い一品を
レバノンからご購入することができます。

貴方のご希望を真摯に耳を傾け、貴方の情熱と想いを理解することに努めます。
そしてそれを私たち独自のユニークなスタイルでデザインをし、完成度の
高い芸術作品として作り上げることです。

私たちの目標はご期待以上の品を意義深くそして目的を持って最高級の品質の
ジュエリーを作り上げることです。

私たちはすべてのTPOに合うように手作りをしたダイヤモンドと純金ジュエリーを
提供しています。

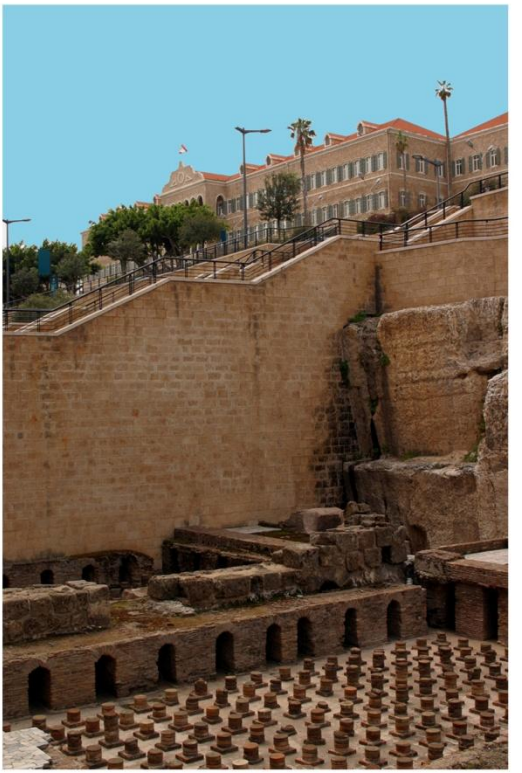


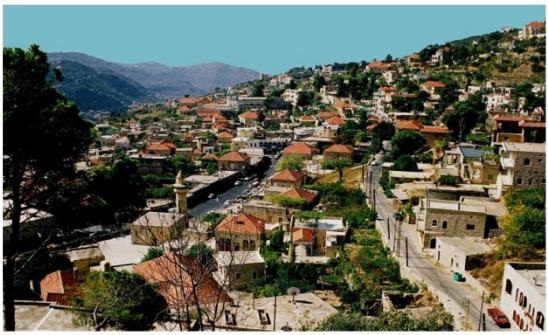
kinjewels9@gmail.com

khouloud.sinno@gmail.com

地理

かつて国際的都市ベイルートは東洋のパリ、また、スキーもできる高い山々は中東のスイス、海岸のリゾート地はモンテカルロと言われたほどレバノンは多様な顔を持つ。地理的にも、３、０００メートル級の高山から奥深い谷に、美しい地中海を有する、変化に富んだ魅力的な国である。この国の地理は大きく４つに分けられる。西から東に大体平行に並んでいて、海岸線がその最西端の緯線となっている。まず、海岸に沿って平地が広がり、そこに４つの大都市シドン（サイダ）、ティール（スール）、ベイルート、トリポリ（トラブロス）がある。この海岸沿いの平原からレバノン山脈へと石灰岩の段丘が続き、シリア国境にはだかるアンチレバノン山脈との間にベカー高原がある。レバノンの２１２キロメートルに及ぶ地中海沿岸は、灌漑設備が整い、肥沃であるため、レモン、オレンジ、バナナ、オリーブ、ナツメヤシ等が栽培されている。そしてフェニキア人の貿易の拠点として栄えた海岸線は、砂丘と岩の岬が入り組むこの土地の地理的特性が大いに活かされたに違いない。また贅沢なホテル、レストラン、カジノの立ち並ぶ美しい海岸は最先端のウォータフロントとして、欧州並びに近隣諸国からの避暑客、マリン・スポーツ愛好家達を魅きつけてきた。





レバノン山脈

ベイルートの南北４８キロメートルに延びる山岳地帯である。ベイルートより望める標高２、７４３メトールのサンニーン（Sanninc）山は、ミネラルウォーターの産地として知られ、さらに標高３、０９０メートルの（コルナ　アッ　サウダ　黒い山、黒い奥の意味）がそびえたっている。厳しく雄大な山々の間には、カディーシャ渓谷（Kadisha valley）に代表される多くの渓谷があり、湧水が様々な色の岩石の間を流れ出ている。しかし、急な斜面は、岩石が多く不毛で厳しい自然を感じさせる。アンチレバノン山脈の南は、ザブダーニ（Zabdani)で分離されてヘルモン(Hermon）は（標高２、８１４メートル）がありダハルルバイダル(Dahr al Baider)の峠を通り抜けると隣国シリアの首都ダマスカスへ至る。また、シドンの東からレバノン山脈へと至る地域にはシューフ山地があり、ここはドルーズ派の住民が多くオリーブの段々畑が拡がる。リターニ(Ritani)川の南で山々はなだらかになり、イスラエルの北のガリレーの丘へと続いている。

ベカー高原

アフリカ大地溝帯の北端であり、地殻運動によりレバノン山脈、アンチレバノン山脈の間に出現した地層である。巨大遺跡バールベックは、地震によって被害を受けたといわれる。この高原は、北はオロンテス(Orontes）川、南はリターニ(Ritani)川の水を集めて、長さ１７６キロ、幅１５キロに及んでいる。ベカー高原からシリアまで続くオロンテス川は、南から北へ流れ、アラビア語で　Nahr al Assi（反逆の川）と呼ばれている。この肥沃なベカー高原は昔から、農業の盛んな土地として有名であり、ローマ帝国時代の穀倉地帯であった。

８００人にも上る子供を含む男女を無差別に虐殺したのである。バシールの兄アミンが、アメリカのバックアップを受けて大統領に就任する。より強力な多国籍軍がベイルートに配置され、表面的には楽観ムードが流れ始めた。侵攻から一年以上後にイスラエル軍は南レバノンへと撤退し、シューフ山脈地帯に非武装地帯を設けた。この地を求めてキリスト教徒軍とドルーズ派軍が激戦し、多国籍軍の撤退が戦争の終焉をもたらすだろうという希望を打ち砕いたのである。レバノンの治安は悪化の一途をたどり、多国籍軍は撤退した。シリア軍だけが残ったが、宗教勢力間の衝突は後を絶たず、平和の試みは全て消え去ったのである。

１９８７年

２月、ドルーズ派とシーア派の間にまた新たな衝突が起こり、西ベイルートのほとんどが炎上した。この時はシリア軍がベイルートに平静を取り戻したのだが、以後長期にわたってシリア軍が駐留することとなった。

１９８８年～１９９２年

１９８８年大統領アミン・ジュマイエルの任期が切れ、続いて陸軍総長ミッシェール・アウン将軍が軍事政権の暫定的首相に任命されている。イスラム教徒側はホス首相代行首班の内閣を正当とし対立し、このためベイルートに二つの敵対する政府が同時に存在することとなった。翌、春、アウン将軍はシリア軍に対し「解放戦争」を宣言。シリア軍の駐在する西ベイルートを無差別攻撃した。このためアラブサミット緊急会議がカサブランカで開かれ、９月、アラブ連盟主導の「国家調停文書」が、サウジアラビアのタイフでレバノン側により調印されている。大統領にルネ・モアッワドが選出されたが、１７日後に暗殺され、代わりにマロン派キリスト教徒の穏健派でシリアとの関係もいいエリアス・ハラウィが選ばれた。１９９１年後半までにレバノン軍はシリアの支援をうけて、ベイルートを掌握しその影響を全土に及ぼした。しかし現在も何千人ものシリア軍が駐留している。

１９９２年

１９９２年８月、２０年ぶりの国会議員の選挙が行われ、ヒズボラはレバノンシーア派の最も主要な代表団体となった。１９９２年後半、億万長者の企業家、ラフィーク・ハリリが首相に任命された。彼はサウジアラビアで財をなした。今日のベイルート再建復興事業の立て役者である。平和が国の大部分によみがえった。

カにまで移住した。レバノン出身の詩人、画家として著名なジュブラーン・ハリール・ジュブラーン（１８８３～１９３２）は、アラブ短編小説の開祖といわれる作家ミカエル・ヌアイメと供にアメリカで活躍し「マハジャル（移民）文学」と呼ばれる一派を形成した。彼はその独創的著書「予言者」（１９２３年）で特に有名である。英語で書かれた「予言者」は、何百もの言語に翻訳されていている。
１９３１年に亡くなったが、彼の希望により遺体はレバノンに運ばれ、今日、ベッシャレの博物館の柩の中に眠っている。この博物館にはオーギュスト・ロダンのもとで学んだという彼の何百もの絵画、デッサン、グワッシュ画、水彩画が展示されている。これらは、ベッシャレ郊外にある岩を切って作られた聖サルキス修道院に収納されていた。この修道院からは、まっすぐカディーシャ峡谷が見渡せ、レバノンの最も有名な、神秘的詩人の永眠の地としてはふさわしい。現在レバノンは内戦を経て復興中であるが、ベイルートでは文化芸術関連の催しは多彩で多く、戦前の活気がしのばれる。他のアラブ諸国に比べてレバノンは、異文化に対する受容性の高さが特徴であり、多くのレバノン人文化人、知識人が海外で活躍している。

ベイルート

ベイルートの歴史

カナン人とフェニキア人の町として繁栄したベイルートは、少なくとも５０００年の歴史を持ち、かつてビロット(Birûta)と呼ばれていた。この古代の名前はセム語の「穴」、「井戸」、そしてアラビア語の「井戸」に由来していた。その頃のベイルートの水の供給に、充分なたくさんの井戸があったからである。

BC１４世紀の初め、アミュニラ王(Ammunira) に治められていた時、王によって書かれた３通の手紙がファラオ・アケネトン (Pharaoh Akhenaton) の宮殿跡のテル・エル・アマルナ(Tell el-Amarna)で発見されている。ビブロスとベイルートの間の地域は、エジプトに敵対するヒッタイトの軍に占領されていた。アミュニラの王はファラオへの忠誠心を述べ、エジプトの射手隊が彼の都市を守ってくれることを切に望むと書いた。しかし、期待は裏切られ、ヒッタイトの影響下へと組み込まれていったのだった。

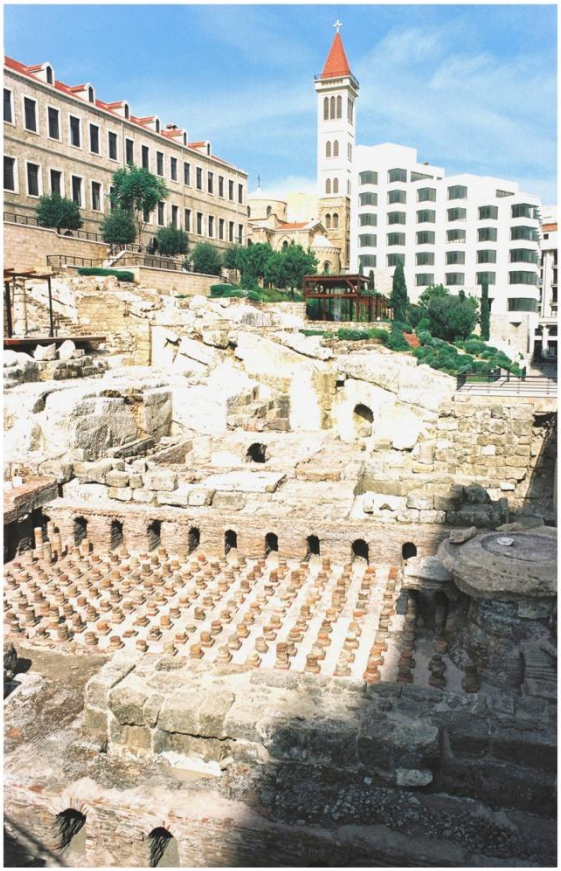
およそ１００年後、レバノンは、エジプトとヒッタイトの王によるシリアの属国となる。ラムセス２世(RamesesⅡB.C.1290~1224)が大軍を率いてシリアに入った。ヒッタイトとの戦いの後、アジア、エジプトとヒッタイトの間に境界線が定められた。その時に、ベイルートの北にある犬の川(Nahar el Kalb) の天然の岩壁に、ラムセス２世の碑文が刻まれた。

ここには多くの石碑があるが、その石碑がレバノンへの侵略の歴史を語っている。３枚のエジプトの石碑のうち、石碑ＸⅣはひざまずく捕虜と共に、ファラオがラ・ハラクテ神(Ra-Harakhte) の前に立つ様子が描かれている。石碑ＸⅥには、２枚の羽の模様の下に頭髪をつかまれた捕虜の頭に一撃を加えるラムセス２世と、アモンレ神(Am-onrê) が向かい合っている。そして石碑Ⅴは、１８６１年、ナポレオン３世が率いたフランス軍の上陸のときに、彼等の石碑の場所のため、削り取られたしまった。

１世紀初め、ベイルートは、アウグストス(Augustus)の植民地となり、地理的条件と港の良さから、ローマ人の東地中海軍の基地となる。ベイルートは皇帝の娘、コロニア・ジュリア・アウグスタ・フェリックス・ベリートゥス(Colonia Juria Augusta Felix Berytus)の名を授与され、美しい広場や、列柱通り、凱旋門、寺院、競技場、浴場が建設された。長円形競技場は、現在のダウンタウン、ワディ・アブジャミール(Wadi Abou Jamil) にあった。ここで見つかった陶板には、不思議な古代の魔法使いの姿と、３５頭の馬の名前が記されている。競馬に出場する馬が、レースで敗北することを祈って作られたものだという。

ベイルートは、他の港湾都市と同じように、またそれ以上に文化の中心となり、競場や演劇などが盛んに行われ、商業も栄えたので、「フェニキアの宝石」の名で呼ばれた。これらの遺跡は、現在もベイルート・ダウンタウンに部分的に残っており、再開発計画の中では、美しい遊歩道として、再現されるものもあるという。

しかし、このかつての美しいローマの都市ベイルートは、幾度もの地震に襲われ、崩壊し、大津波も発生した。５５１年の地震は、これまでの中で最大級のもので、３万人の犠牲者を出し、都市は全崩壊し、海にのまれた。



３～４世紀に発達した法学校は有名で、多くの優秀な法学者がベイルートに集まり、アラブ各地、アルメニア、ギリシャ等から生徒達が学びにやって来た。しかし、５５１年の大地震によって法学校も崩壊し、多くの生徒達が犠牲になった。後の皇帝ジャスティニアン(Justinian) の送った金と人的援助により、ベイルートの一部が復興された。

その後イスラム教徒アラブの支配に移り、１１１０年から１２９１年までは十字軍に、そしてマムルークに支配され、１５１６年からオスマントルコ帝国の支配となった。ファハル・エッ・ディーン２世マアアン(Fakhar ed-Din II Maan)は、トルコ軍の上陸によるベイルート商業への打撃を憂慮し、防御をベイルート港に巡らしたが、徒労に終わった。オスマントルコの権力の下、政治闘争が起こり、１７７２年にはロシア海軍の砲火を浴びた。第二次世界大戦の終結によって、４００年間のトルコの支配は終わり、フランスの統治を経て、１９４３年にレバノンは独立した。

ベイルートの遺跡

１００万人の人口を持つ大都市ベイルートは、その歴史を物語る多くの遺物にも恵まれている。現在の復興工事に伴い、地中から発見されたものを見学することができるが、その調査の後には、再開発のため、ベイルートが新都市として生まれ変わる頃には、また、地中に深く眠ってしまう遺跡もある。

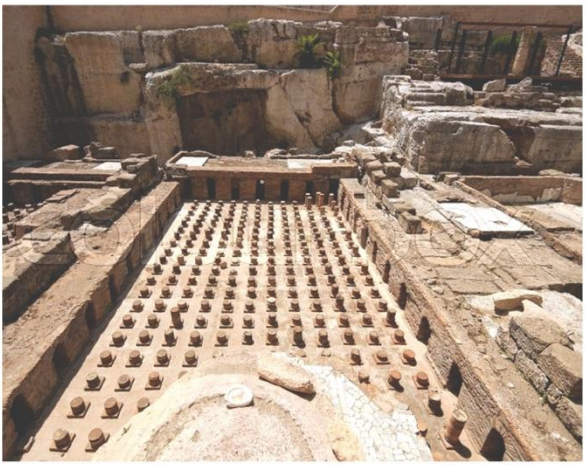
ローマ・ビザンチン遺跡

５本の列柱

聖ジョージ・マロン派カテドラルの左にあるこの５本の柱は、ローマ時代の列柱通りの一部で、１９６３年に発見された。

ローマ浴場

１９６８～６９年に発見された。銀行通りの裏手にあり、現在、清掃と発掘が続けられいる。



ローマン・エクセドラ(Excdra)

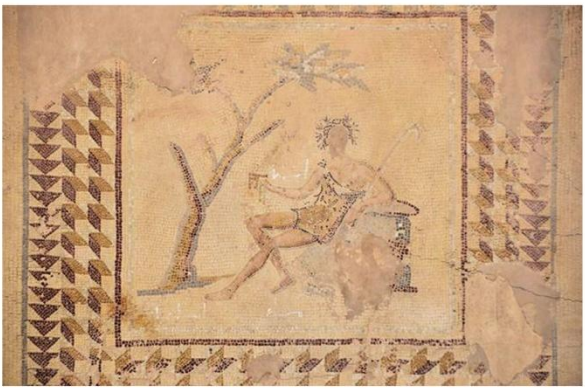
この半円経の文化的建造物は、聖ジョージ・マロン派カテドラルの西で発見された。その後、１９６３年に、現在の港の東入口近くに移された。

雪庇付の４本の柱

１９６８～６９年に発見された。ネジュメ広場のパーリアメント・ビルの正面にある。

彫刻のある柱

ネジュメ広場とグレート・モスクの間にあるこの５本の柱は、ローマ教会堂の一部であった。１９４０年に発見され、後に国立博物館とダマスカス通りの間に設置された。



モザイク

５世紀のビザンチン教会の床だった、これらのモザイクはベイルートの南にあるハルデ地区(Khaldc)のベイルート国際空港開発に伴って、国立博物館近くに移された。

十字軍、マムルーク、オスマントルコ建造物

中世の壁

十字軍、マムルーク時代の壁は、ウェイガンド通り(Weygand St.)と、古いパトリアーチ・ホワイエック通り(Patriach Howayyeck St.)に沿って見られる。

十字軍の城

現在の港の近くに大きな十字軍の城があった。旧港の拡大工事に伴って、１８６０年に破壊された。わずかな東側壁の一部だけが残っている。１９９５年の発掘では、巨大な保存の良い壁の基礎が発見され、それにはローマ時代の柱が補強の為に使われている。

グランド・サライ(The Grand Sarai)

１８５３年のオスマントルコの兵舎で、フランス統治時代には、フランス政府の本部とされた。レバノン独立後は、政府のパレスとなった。

オスマントルコ軍病院

グランド・サライの正面にあるこの大きな建物は、１８６０年に軍病院として建てられ、フランス統治時代から法廷として１９６０年まで使われた。現在は完全に修復され、再開発議事堂となっている。

オスマントルコ時計台

グランド・サライの側にあり、１８９７年に建てられた。

モスクと教会群

アル・オマーリ・モスク(Al-Omari Mosque)

十字軍の聖ヨハネ教会であった。１２９１年、マムルークによってモスクに変えられた。十字軍以前にも、ビザンチン時代の基礎が見つかっており、初期の寺院であったことを示している。

ザウィヤート・イブン・アル・アラク(Zawiyat Ibn al-'Arraq)

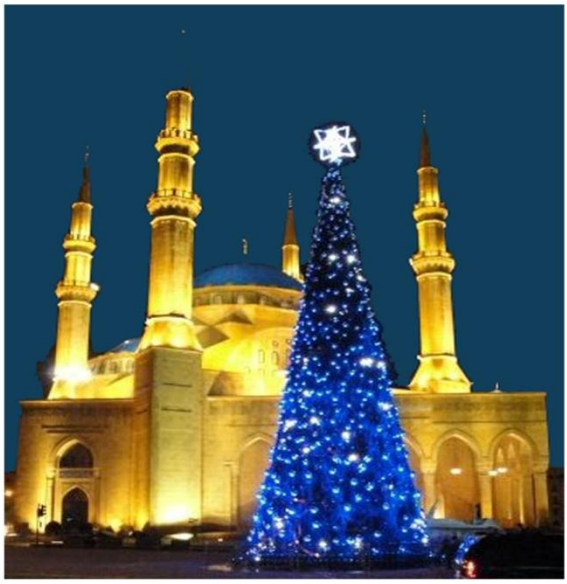
ムハマンド・イブン・アル・アラク・アド・ディマシュキー(Muhamed Ibn-al'Arraq ad-Dimashqi)によって、１５１７年に建てられた。元はイスラム教法律学校であったものをイスラム教の礼拝堂になったのは、オスマントルコ時代だった。

アミール・アッサーフ・モスク(Amir 'Assaf Mosque)

バーブ・エッ・サライ・モスク(Bab es-Saray Mosque)とも呼ばれ、エミール・マンスール・アッサーフ(Emir Mansour 'Assaf 1572-80)によって、ビザンチン時代の救世主教会の上に建てられた。市役所の反対側にある。

アミール・ムンザール・モスク(Amir Munzer Mosque)

ナオウファラ（噴水）モスク(Naoufara Mosque)とも呼ばれ、中庭に８本のローマ時代の柱がある。１６２０年に建てられた初期のモスク。



マジディーユ・モスク(Majidiych Mosuque)

１９世紀中半に、トルコのスルタン・アブドゥル・マジド１世(Abdul Majid I,1839~61)の名を取り、建てられた。

アブウ・バクル・アッ・スィッディーク・モスク(Abu Baku As-Siddiq Mosque)

マムルーク時代の遺跡の上に、第一時世界大戦中に建てられた。ダッバーガ・モスク(Dabbagha Mosuque)は、オスマントルコによる都市再開発計画のひとつとして、トルコ人統治者アズミ・ベイ('Azmi Bey) によって１９１５年に建てられた。

ギリシャ正教聖ジョージ・カテドラル

１７６７年に建てられたベイルートで最も古い様式の教会だが、その壁の装飾は、戦争中に失われた。

ギリシャ・カトリック・聖イリアス・カテドラル

１９世紀半ばに建てられ、かつてはすばらしい大理石のイコンで飾られていた。

カプチン修道会聖ルイス教会

１８６３年に創立。ラテン教会系の外国人コミュニティーに使われた。

福音教会

１８６７年に英系米国人福音宣教師達によって建てられた。

マロン派聖ジョージ教会

１８８８年建立。ネオクラッシク・スタイルの教会。

博物館

国立博物館

１９４２年に開館され、現在修復のため、閉館中。ダマスカス通り。

スルソック館(Sursock Muscam)

現代美術博物館、スルソック地区アシュラフィーエ(Sursock Quater Ashrafich)

アメリカ大学考古博物館

小さいが充実した博物館で必見である。ブリス通りアメリカ大学(American University Bliss Str.）キャンパス内にある。
平日１０：００ＡＭ～４：００ＰＭ開館。

鳩の岩

ベイルートの西、ラウシェ(Raouche）にある、地中海の中にそびえ立つ巨岩で、その近くでは、古代、人類が生息していた証である火打ち石や基礎的な道具が発見され、現在、アメリカ大学考古博物館に収納されている。絶壁に並ぶカフェやレストランは眺めも良く、市民の憩いの場となっている。

トルコ風呂

アル・ノウズハ・トルコ風呂(Al-Nouzha Hammam）は、バスタ・タハタ(Basta Tahta)地区にあり、古き良きベイルートを垣間見ることができる。伝統的な方法の垢すりは、本格的で、サウナ、マッサージも利用できる。女性専用時間は、月曜の朝のみで、この他の時間は男性専用となる。

スポーツ

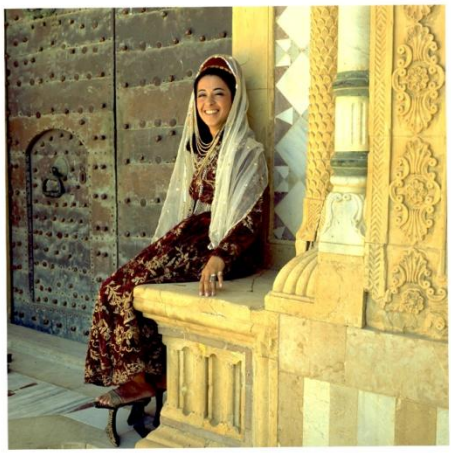
ベイルート競馬場では、毎日曜日純アラブ血統種馬のレースを行っている。また、９ホールのコースのあるベイルート・ゴルフ・クラブは近隣諸国から訪れる人達もいる程、貴重な存在で、水泳プール、スカッシュとテニスのコートも併設している。マリン・スポーツは、海岸沿いの海水浴場、スウィミング・クラブ等で、釣りからダイビング、水上スキーまで楽しめる。

ベイト・エッ・ディーン

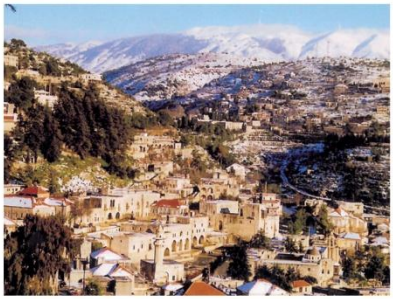
ベイルートから４８Kmのところにあるこの宮殿は海抜９００メートルの高さにある。壮大な回りの山々と優雅なデザインのこの調和は目をみはるものがある。エミール・ベシール・シェハービ(Emir Bechir Chehabi) 二世は１７８８年に、ベイト・エッ・ディーンを封建時代の都として選んだ。宮殿と回りの庭園の整備は、彼が１８４２年に追放されるまで続いた。しばらく衰微をたどったが、この宮殿は１９３０年に史跡に指定され修復された。レバノンの大統領の夏の避暑地となったが、今は博物館および文化センターとなっている。宮殿のデザインは、その時代と完全に調和している。外観は木々や崩れかけた段々の庭で引き立てられている。華麗に模様を施された大きな入口を抜け、アーチ型天井の衛兵詰所から６０メートルもある前庭までの景観は素晴らしい。３方はアーチを連ねた回廊の流れるような規則性が表現されているが、一方には眼下に広がる美しい谷、そして赤屋根の家々の美しいデール・カマル(Deir Kamar)までが見渡せる。この場所は集会や祭の時に使われた。ここにはこの宮殿が建てられた当時の封建時代の生活を初め、青銅器時代、ローマ時代、イスラム時代等の考古遺物を陳列した博物館がある。西側の対の階段を登ってダール・エル・ウスタ(Darel Wousta)に行くと、ここは首長の侍従達と５００頭の馬、その倍の兵士達を収容していた。

階段の上にある入口は、多色の大理石と歓迎の銘刻とで豪華に装飾されている。アーチ型の屋根のついた回廊を抜けると、泉のある気持ちのいいやや小さめの中庭があって、馬小屋にはビザンチン時代の床のモザイクのコレクションがある。贅沢なつくりのダール・エル・ハリーム(Dar el Harim)はベシール王子の私邸である。ここは素晴らしい眺めで、大理石が、さらに手のこんだ模様にはめこまれ、彫刻もさらに高度である。またドーム型の屋根がついた素晴らしいアラブのハンマーム（浴場）がいくつかある。入浴の前後には、寒い部屋、なま暖かい部屋、ゆだるように暑い部屋を選択でき、体を休め、政治や文学などが語られたという。

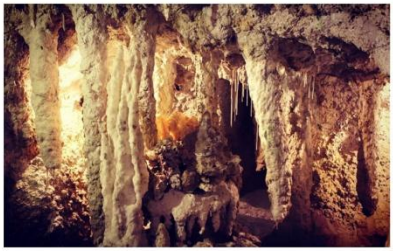
ベイト・エッ・ディーン近郊



デール・エル・カマル(Deir el-Qamar)
ベイルートから４０Kmの赤屋根の家々の美しい小さな山合いのこの町は、エミール・ベシールがベイト・エッ・ディーンを建設する以前（１６～１８世紀）は封建領主たちの都であった。いくつかの興味深い建築物が残っているが、最も注目すべきものは１９４３年にさかのぼるファクル・エッ・ディーン・モスク(Fakhr el Dine Mosque)である。



カファル・ヒム(Kfar Him)
８０年以上前に、ここで発見された大きな洞窟には、ずらりとならんだ石筍や鍾乳石があり見事である。デール・エル・カマル手前。



ベイト・エッ・ディーンの地図

A：ダール・エル・バッラニーエ(Dar cl-Baraniyych)

1．表玄関

2．アル・ミーダーン(Al-Midan)

城の入口であり、107×45平方メートルの庭となっている。御者や廷臣、訪問客が集まっていたところ。戦いや狩りなどへ出かける。首長の行列も行われた。

3．ドルーズ教徒のリーダー、カマル・ジュンブラット(Kamal Jumblatt)博物館

4．博物館入口

5．アル・マダファ(Al-Madafa) 現在、ラシード・カラミ(Rashid Karami) 考古学・民族学博物館

かつては、旅人をもてなす部屋として使われた。旅人は3日間、身分や旅の目的にかかわらず、皆、もてなされた。

B：ダール・エル・ウスタ(Dar cl-Wousta)

6．宮殿中心部への入口

7．宮殿を守っていたシューフのハマーデ(Hamade)首長の邸宅へ抜ける道

8．大臣達の執務室

9．中庭

10．大臣ボトロス・カラミ(Boutros Karami)の部屋

11．ダール・アル・カタバ(Dar cl Kataba) 書記達の執務室

C：ダール・エル・ハリーム(Dar cl-Harim)

12．正面玄関

13．高級ハーレム

14．「柱の部屋」待合室

15．レセプション・ホール

16．ラマルティン(Lamartin)フランスの詩人・歴史家の部屋

17．法廷

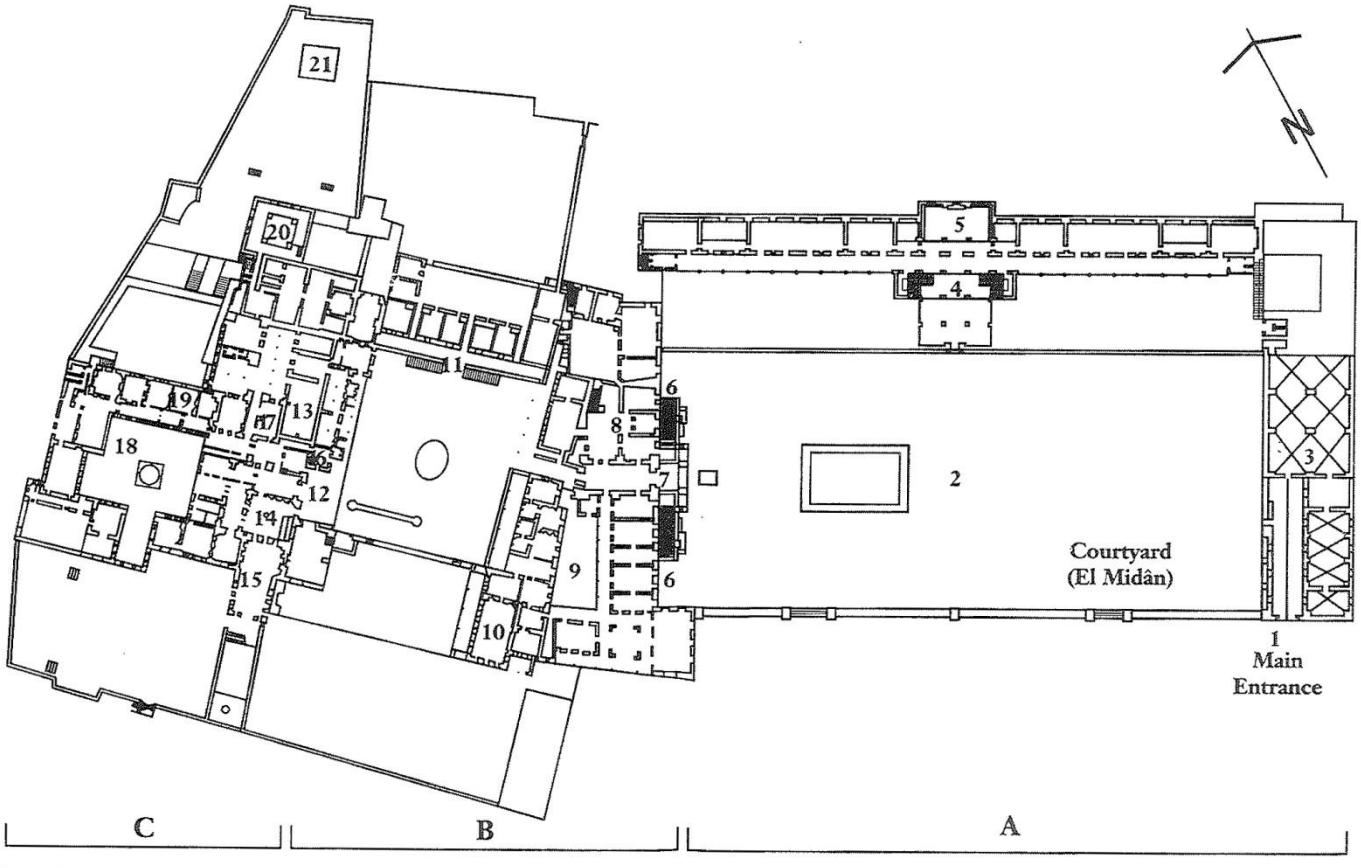
18．首長の家族用中庭

19．台所。召使い達によって毎日500人以上の人々の食事が作られた。

20．ハンマーム（浴場）

21．首長の最初の妻、セット・シャムス(Sitt Chams)の墓。

1947年にイスタンブールから戻った首長の遺体も埋葬された。



Plan of Beiteddine Palace

シドン

シドン（現在のサイダ）は、商業の中心地として、また封建的な雰囲気を持つ独特な都市である。フェニキア人時代にガラスが考案されたのも、ベイルートの南４１Kmのこの地だし、骨貝から王族の色を表す紫がかった緋色をだす珍しい染料が取り出され活用されたのもここだった。主な遺跡は、十字軍の城だが、北へ１kmのところに、素晴らしいエシムーン（Eshmoun）寺院があり、今もなお、昔のままの柑橘類の香りに囲まれている。（シドンは、柑橘類、バナナ等果物の産地として知られる）シドンが独立した都市国家で、ビブロス、ティールといった他の都市と競っていた時代に、この寺院は、美しい王室の庭の中に建てられた。陸上で偉大な力を誇っていたペルシャ帝国が、エジプト、ギリシャを征服するために、シドンは要衝となり栄えた。またアレキサンダー大王の支配下に入ってからも格闘技の競技等の行われる繁栄した都市となった。その後、シドンは何度も侵攻され、５５１年には地震に襲われ街が全崩壊した。１１１１年、フランク人の十字軍が、シドンを包囲し、シドンは４７日間抵抗を続けた後、降伏した。

海の城塞(Qalaat el-Bahr)

港を守り、食料の供給や軍隊が安全に届くことを保証するため、１３世紀に十字軍によって建てられた要塞。堤によって、小さな島から本土へ繋がっている。城は主に２つの塔と壁から成っており、ローマ時代の柱が補強のため水平に使われている。外壁が見た目にもおもしろい。マムルーク王朝が破壊し、アラブが再建された。左側の塔の方が、より良い状態で残っている。十字軍兵士達が付け加えた彫像や、建物の装飾は奪われ、それらの行方は全くわからず、現在残っているのは、記録だけである。崩れそうな大きい方の塔の地下を探索し２つの水槽を見たら、西の塔に登ると、旧市街を望む眺めが素晴らしい。

旧市街と隊商宿(Khans)

海の城から聖・ルイ城へ向かって歩くと迷路のような旧市街がある。ここはファクル・エッ・ディーンの統治の記念碑的存在である。彼はレバノンを、東ローマ帝国から独立できるほど強くしようとし、シリアやヨーロッパとの交易を増やすことによって部分的に達成された。シドンは、２００年間ダマスカスの主たる港として機能してきたので、この時期は、町にとって貿易の復興期のようなものだった。大きな隊商宿(Khans) が作られ、19世紀の経済活動の中心となった。カーン・エル・フランジ(Khan el Franji)「外国の宿」は、アーチ型の天井を持つ二階の回廊が、まんなかに手の込んだ庭と噴水がある。広大な長方形の中庭を囲んでいる。後にフランス領事館となり、再建され、現在はシドンの文化センターになっている。周囲に網目のように広がる路地とスーク（市場）は、物売りで賑わい続けている。昔ながらの職人達が仕事をしたり、漁師達は港の近くで新鮮な魚を売っている。また、スークのはずれにある伝統的なカフェでは、男達が客と水たばこを吸い、トルココーヒーを飲みながら商談に余念がない。ここの名産である砂糖菓子や砕けやすいサニョウラ(sanioura)が美味しい。

大モスク(Jaamia-el-Kabir)

市場の南、海の傍らに、大モスクが建っている。モスクとなる前は教会だった。壁は１３世紀に十字軍がつくった壁そのままに修復された。海から見る姿は堂々としており、教堂が中央の中庭をとり囲む、アーチ型天井の礼拝場を持つ美しいモスクとなっている。またモスクの内陸側のテラスは、ファクル・アッ・ディーンの宮殿のものである。

聖ルイの城塞

南の内陸にフランス王、ルイ９世に捧げられ１３世紀半ばに建てられた小さな十字軍の城がある。マムルーク時代、そして特にファクル・エッ・ディーン２世によって１７世紀に修復された。足もとの丘にはたくさんのローマ時代の柱が転がっている。

骨貝の丘

聖ルイの城の南、共同墓地と住宅に覆われながらも、フェニキア文明と、フェニキア人達が、貝から紫がかった緋色の染料を取り出すのに夢中になっていたことを、明白に証明するものがある。長さ１００m、高さ５０m の骨貝の塚は、染料を取り出す過程で出てくる不要物の蓄積である。また頂上に、ローマ時代の建物が建てられたと思われる。砕かれた骨貝の貝殻が、今でも西側の斜面に沢山残っている。

旧市街と隊商宿(Khans)

海の城から聖・ルイ城へ向かって歩くと迷路のような旧市街がある。ここはファクル・エッ・ディーンの統治の記念碑的存在である。彼はレバノンを、東ローマ帝国から独立できるほど強くしようとし、シリアやヨーロッパとの交易を増やすことによって部分的に達成された。シドンは、２００年間ダマスカスの主たる港として機能してきたので、この時期は、町にとって貿易の復興期のようなものだった。大きな隊商宿(Khans) が作られ、１９世紀の経済活動の中心となった。カーン・エル・フランジ(Khan el Franji)「外国の宿」は、アーチ型の天井を持つ二階の回廊が、まんなかに手の込んだ庭と噴水がある。広大な長方形の中庭を囲んでいる。後にフランス領事館となり、再建され、現在はシドンの文化センターになっている。周囲に網目のように広がる路地とスーク（市場）は、物売りで賑わい続けている。昔ながらの職人達が仕事をしたり、漁師達は港の近くで新鮮な魚を売っている。また、スークのはずれにある伝統的なカフェでは、男達が客と水たばこを吸い、トルココーヒーを飲みながら商談に余念がない。ここの名産である砂糖菓子や砕けやすいサニョウラ(sanioura)が美味しい。

大モスク(Jaamia-el-Kabir)

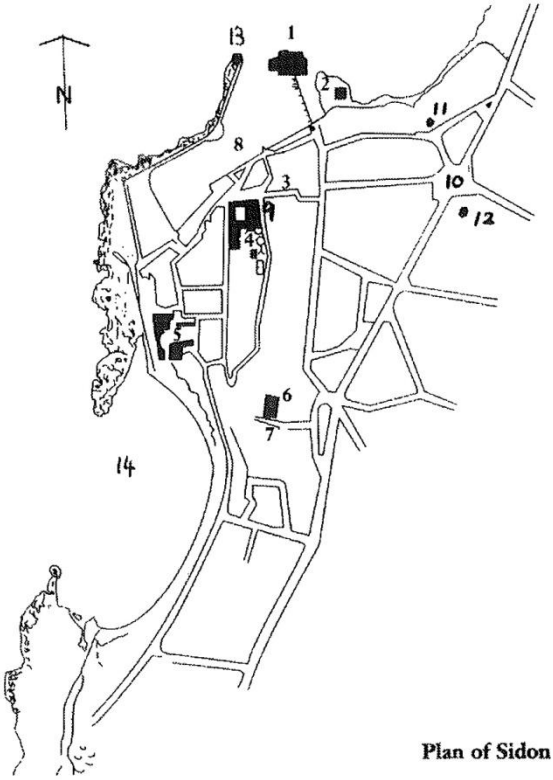
市場の南、海の傍らに、大モスクが建っている。モスクとなる前は教会だった。壁は１３世紀に十字軍がつくった壁そのままに修復された。海から見る姿は堂々としており、教堂が中央の中庭をとり囲む、アーチ型天井の礼拝場を持つ美しいモスクとなっている。またモスクの内陸側のテラスは、ファクル・アッ・ディーンの宮殿のものである。

聖ルイの城塞

南の内陸にフランス王、ルイ９世に捧げられ１３世紀半ばに建てられた小さな十字軍の城がある。マムルーク時代、そして特にファクル・エッ・ディーン２世によって１７世紀に修復された。足もとの丘にはたくさんのローマ時代の柱が転がっている。

骨貝の丘

聖ルイの城の南、共同墓地と住宅に覆われながらも、フェニキア文明と、フェニキア人達が、貝から紫がかった緋色の染料を取り出すのに夢中になっていたことを、明白に証明するものがある。長さ１００m、高さ５０m の骨貝の塚は、染料を取り出す過程で出てくる不要物の蓄積である。また頂上に、ローマ時代の建物が建てられたと思われる。砕かれた骨貝の貝殻が、今でも西側の斜面に沢山残っている。



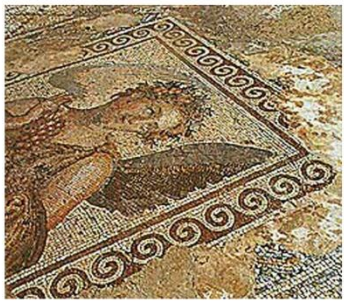
Plan of Sidon

1 海の城
2 レストハウス
3 スーク（市場）
4 ハーン・アル・フランジェ(Khan el Franj)
5 グランド・モスク(Grand Mosque)
6 サン・ルイ城(Castle of St.Louis)
7 骨貝の塚
8 サイダ港
9 ハーン・エッ・サブーン(Khan es Saboun)
10 ネジュメ広場(Sahet el-Nejmeh)
11 警察署
12 市役所
13 灯台
14 エジプト港

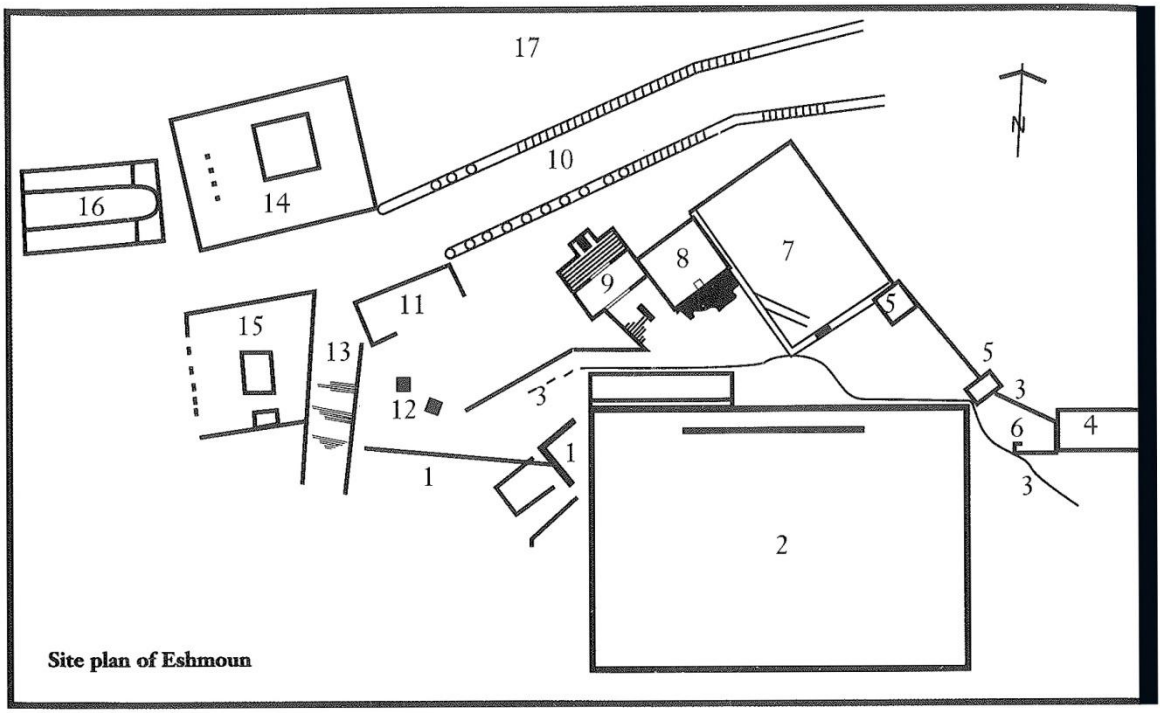
エシムーン

エシムーンはシドンの守護身だった。彼はベイルート出身の狩り好きな人物で、ある日、狩りに出かけて、アスタルテ（Astarte）（セム族版アフロディア、愛の女神）に言い寄られた。逃れるためには、自殺するしかなかった。アスタルテが、神として彼を生き返らせた。ベイルート近郊のカブルシュムーン村にもこの若い神の墓とともに、この伝説が言い伝えられている。アラビア語で、ブスタン・エル・シェイク(Bustan el Sheikh)と呼ばれる。ベイルートより１時間以内、シドンより１Kmの青々と繁るオワリー河岸の柑橘類の木立ちの中にフェニキア時代の遺跡エシムーン神殿はある。エシムーンは、癒し、復活の神として奉られた。神殿の場所は癒しの儀式に必要なため水際が選ばれた。奉納した者の名前の記された像の中には、当時の小児科医としてのエシムーンが、子供に提言している描写のあるものも発見された。１８５８年に発見され現ルーヴル博物館に収められている。

エシムーンアザル(Eshmounazar) 石棺の記述によれば、彼と彼の母アマシュタルテ(Amashtarte アスタルテの召し使い）が、シドンの神々の神殿を建立した内の一つがエシムーン神殿であるという。神殿はB.C.７世紀にエシムーンアザール２世によって建てられ、４世紀の中半に、破壊されたまま修復されなかった。ローマの柱廊を通り、神殿へ向かう（地図１０）。これらの柱は、かつては、商店と共に立っていた。そして右手に雄牛の頭の彫刻の見事なペルシャ時代までさか上る柱頭が見られる。これは中庭に聖堂が作られた後、ここに移されたものである。（地図１２）。最も古いのはB.C.６世紀で、フェニキアがバビロニアの支配下にあった頃の壁と頂上への短い階段を持つピラミッド型の建物である。また、最大の台壁（地図２）はシドンの王、エシムーンアザールにB.C.５世紀に建てられ、後に増築された。水路（地図３）を通り、癒しの水は儀式の行われた水槽（地図４、５、６、９、１１）に送られた。他の寺院はB.C.３世紀に加えられた。（地図７）。高い石造りの土台の正面に、ギリシャの礼拝堂があり（地図８）、そこでは礼拝者や狩りの様子、子供の遊びなどを描いた壁の帯状装飾がみられる。また２頭の翼を持つライオンが11x10m四方のアスタルトの王座を守っている。王座はエジプト風じゃ腹の彫られた一つの石で出来ている。また後から、今は頭のないライオンに守られたモザイクの小部屋（３３５年）が加えられた。池の左側の２２m もの壁には酒宴の様子や、太ったにわとりを捕まえようとしている男のレリーフがある。それはギリシャ神話の医学の神アスクレピオス(Asklepios) にわとりを捧げる儀式にそっくりでエシムーンがその起源であることをうかがわせる。



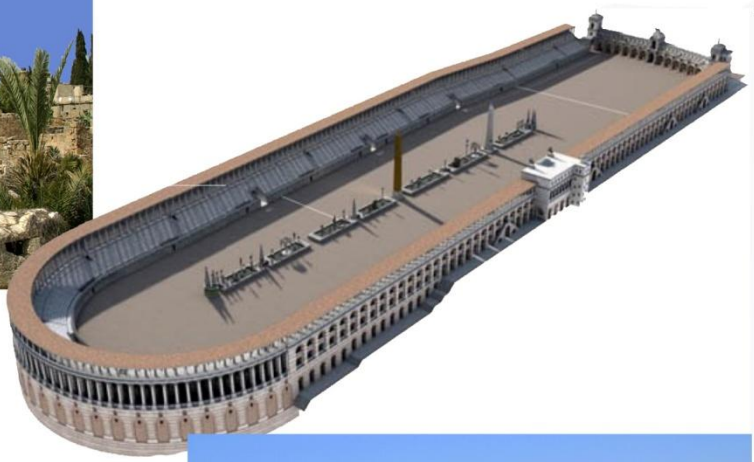
ローマ、そしてキリスト教時代の初め（B.C.６４年から A.D. ３３０年）、エシムーン神殿は奇跡の水のために巡礼地となった。フェニキアの神殿にローマの完璧な階段が付いた（地図１３）。また清めの池、妖精の寺院には美しいモザイクがある（地図１５）。ローマ時代の柱廊の左には、四季を描いたモザイク画がある中庭があり（地図１４）、この左にはビザンチン時代の初期キリスト教会がある（地図１６）。エシムーン神殿の意義ある発掘物は、ルーブル美術館、イスタンブールのトプカピ考古学博物館、そして、ヨーロッパ中のさまざまな博物館にある。精巧な彫刻を施した大理石製の石棺の貴重なコレクションは、ベイルートの国立博物館にある。



1　新バビロニア台壁
2　エシュモナザル王時代の台壁
3　水路
4　聖池(B.C.　5世紀)
5　第2の池
6　神聖儀式の場
7　B.C.3世紀の寺院
8　ヴィーナス、アストラテ神座の池(B.C.　3世紀)
9　階段席と池
10　ローマ列柱（3世紀）
11　清めの池
12　雄牛の頭部彫像のある聖堂
13　階段
14　ベランダのある中庭と四季のモザイク（B.C.3世紀）
15　妖精と酒神の巫女のモザイク
16　ビザンチン時代の教会
17　住居地域跡

ティール

古代フェニキアの３つの大きな都市国家のうち、一番南に位置するティール（現在のスール）は、島の上に築かれB.C.１０世紀にヒラム王によって海が埋め立てられ２つの島が１つになり、都市は大きくなっていた。かつては、地中海で最も重要な交易の拠点だった。メルカート(Melqart) 神（フェニキア版ヘラクレス）が、散歩中に、骨貝から紫色がかった緋色のための染料がとれることを発見したと伝えられているのがここである。ティールの住民が、ギリシャにアルファベットを伝えたとされ、彼の妹のヨーロッパにちなんで、大陸がヨーロッパと名付けられた。ティールの船乗り達は、大西洋へ航海し、アフリカを周航して、カルタゴ、キプロス、ロードス、クレタに植民地を築いた。ティールの繁栄を妬み、B.C.６世紀の初め、バビロニアの王ネブガドネザルが攻撃をかけ、１３年間住人達は抵抗したが降伏し、王は王位を剥奪され、人々は奴隷にされた。B.C.３３２年に、アレキサンダー大王が、ギリシャとペルシャの間の戦いの戦略上の要衝として、征服を計ったが、彼らは７ヶ月に渡って籠城し、アレキサンダーが、敷石を敷きつめて、彼らの島への道を築いて、はじめて、大王の手に落ち、３万人の住民達は殺されるか奴隷として売られた。その後、この道には長年に渡って、砂が堆積し、今では半島になっている。ギリシャの歴史に名を残すとともに、ティールは聖書にも登場する。ティールの王ヒラム(Hiram)は、ソロモンの神殿のため彼にレバノン杉を送った。B.C.６４年にティールと古代シリアがローマの支配下に入っても、ティールでは銀のコインが鋳造された。ローマ人は素晴らしい重要な建物を多く残した。ビザンチン時代のティールは新約聖書にも登場するほどの第２の黄金時代を迎え、ティールの大司教はフェニキア中の首席司教となった。これらのことは、建物や共同墓地の碑文に示されている。その後、イスラム教徒によって征服されたが、商業拠点としての性質は変わらず、その強硬な城は十字軍の侵略にもよく耐えた。彼らの支配の後、マムルーク、オスマントルコに支配され第一次大戦によって、ようやくレバノン民族の下に統一された。１９７９年ユネスコによって、世界遺産に指定された。



旧市外

港はシドンの方向を向いていることからフェニキア時代にはシドン港と言われた。トルコの隊商宿がスークの側にある。このマムルークの家は、考古総局によって修復され文化と情報のセンターとなっている。またスークの中の２つのドームを持つ白いシーア派のモスクも興味深い。また、長さが約７５m 、幅が１０m ほどのローマの道が海沿いに昔の港まで続いている。巨大な大理石の敷石は、ローマ・ビザンチン時代からのもので、もっと古いモザイク模様の道にまで敷かれている。発掘現場の北の端に、２０００人の観客を収容したローマ時代の大競技場と、取り壊された十字軍の城のかなり大きい土台がある。周囲にあるたくさんの瓦礫の山は、おそらく、競技場の下の浴場に使われたものだろう。その後やって来たアラブ人達も、この贅沢な浴場を何世紀にもわたって利用した。さらに北の内陸へと続く主要道路際に十字軍の大聖堂の廃墟がある。ここには、もともと、ティールの神、メルカートを奉った素晴らしい寺院があったのだが、ティールの司教により大聖堂が建てられた。キリスト教徒によって再利用された大きな花崗岩の円柱の他は、それぞれ建物の名残を残すものは何もない。

ラス・エル・アイン(Ras el-Ain)

ティールより南へ６Km。フェニキア時代には、ティールの主要な水源として利用され、ローマ時代の水路は、街のすみずみまで行き渡っていた。

ヒラム王の墓

ペルシャ時代(B.C. ５５０～３３０）の遺跡。エルサレムの寺院にみられるフェニキア建築を賞賛したヒラム王の墓と呼ばれている。ティールより南へ６Km。カーナ(Qana)への道上にある。

サラファンド(Sarafand)

カナン人、フェニキア人の遺跡。ローマ時代の港の建造物が発見された。聖書上では古代セレプタ(Sercpta) といわれる街。現在も古代フェニキアの芸術である吹きガラスの工房がある。ティールより北へ２８Km。

エリア　Ⅰ

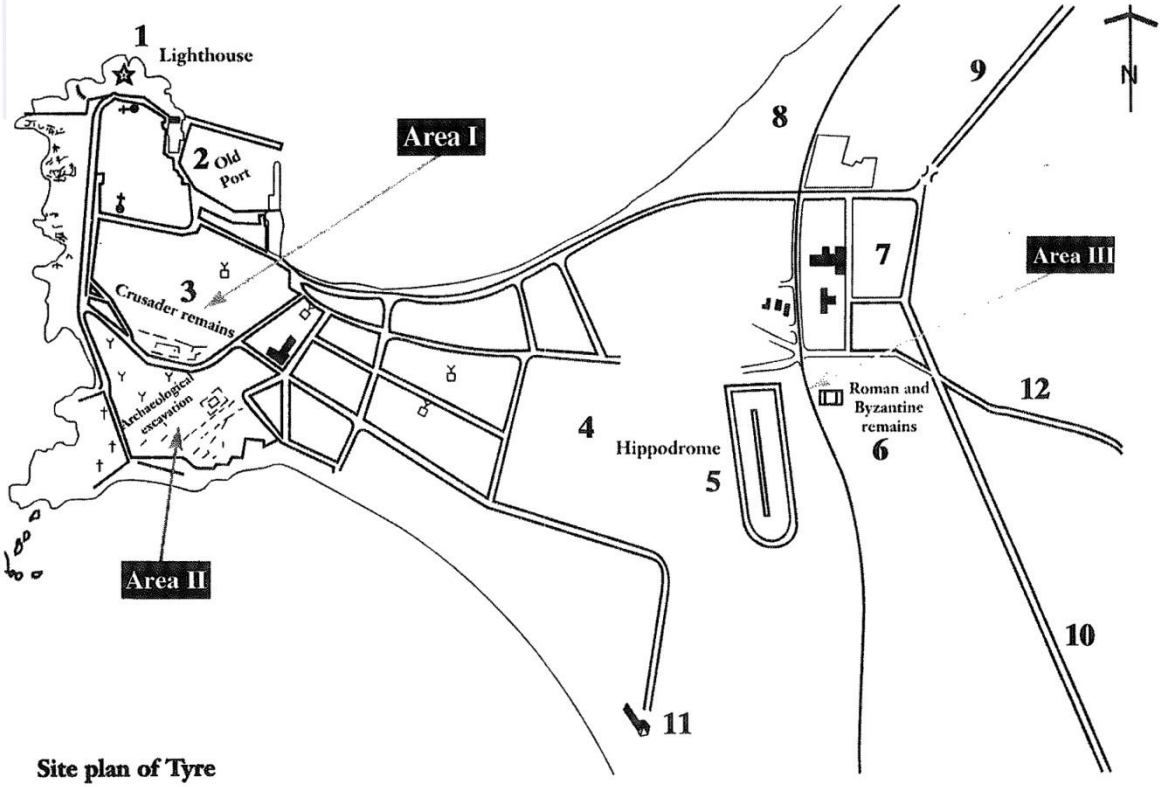
フェニキア時代、島だった所にある、市民の建物、列柱、公共浴場、モザイクの通り、長方形の闘技場などのある巨大な地域。海岸へ向かい敷地のはずれまで歩くと左側に古代ギリシャの柱がある。他にはヘレニズム、ローマ、ビザンチン各時代の遺物が見られる。少し離れた海岸からは素晴らしい石造りの防波堤のある“島”の姿をうかがい知ることができる。この港は南側に面し、エジプトの方向を向いていたため“エジプト港”といわれた。

エリア　Ⅱ

十字軍の大聖堂があり、低い基礎部と建て直された花崗岩の柱が見られる。また、ローマ・ビザンチン時代の道路や他の建造物も興味深い。エリアⅠより徒歩５分。

エリア　Ⅲ

広大な共同墓地、凱旋門。そして世界最大級のローマ競技場の一つである競技場がある。これらは全て２～６世紀のものである。１９６２年に発掘された大共同墓地では、ローマ、ビザンチン時代の多数の装飾的な石、大理石の石棺が発見された。ビザンチンの教会の基礎も見ることができる。アーケードがローマ時代の道路にまたがって立ち、古代都市の中心へ向かっている。また水道も完備されていた。大共同墓地の南には、１９６７年に発掘、部分的に再現された大ローマ競技場がある。４８０メートルのそれは２万人の観客達が２輪戦車レースの死闘を見に集まっていたところだ。２輪戦車の御者達は、現在も存在する折り返しポイントである石、ミータを７度回らなければならなかった。レースの様子は壮観だったことだろう。エリアⅠ・Ⅱより徒歩３０分、ハイエ・ル・ラムル(Hay Er-Raml) から歩くと、アレキサンダー大王の足跡を探ることができる。



Site plan of Tyre

1 灯台
2 旧港
3 十字軍の遺跡
4 考古遺跡
5 長円形競技場
6 ローマ・ビザンチン遺跡
7 El Bass
8 El Raml
9 至ベイルート
10 至ナクーラ
11 レストハウス
12 新市街

ティブニン

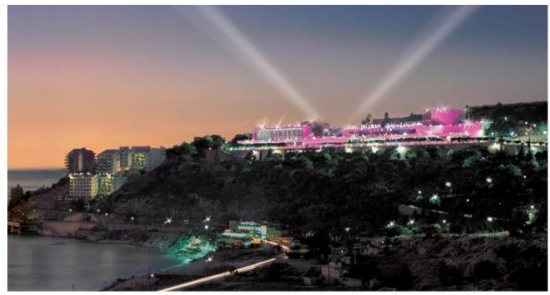
十字軍が、イスラム教徒の下にあったティールを彼らから奪うために、遠いイスラエルのティビリアス(Tibirias)を派兵の拠点としていたが、１１０４年にはヒュー・ド・サン・オメール(Hugh de St Omer) によってティール近くの駐屯地としてティブニンが建てられた。１１８７年にサラーハ・エッ・ディーン(Salah ed din)に、１２１９年にはスルタン・マレク・モハダン(Sultan Malck Mohadan)に破壊され１０年後に再建された。１２６６年にはスルタン・バイバルズ(Sultan Baybars) が城を征服した。その後、１７世紀にトルコ人の支配者ダーヘル・アル・オマル(Dahcr al Omar)によって再び立て直された。十字軍に寄贈されたいくつかの大きい浮き彫りの石の他、ほとんどのものは、アラブ風の建造物である。外壁は合理的で完璧、また部屋はアーチ型の天井を持ち広々としている。眺めは壮麗だが、地面に開いている穴や窪みは危険なので足元に気をつけよう。西側には、四つの見張り塔を持つ小さなアラブの要塞がある。東へのメインロードは、スルタニーエ(Soulta-niyc) を過ぎたら南へ方向を変えるとティブニンにはいる。

ジュニエ

ジュニエの町は、北はマ－メルティンから南はズ－クにいたる。東部からはハリ－サのカテドラルとマリア像「Our of Lebanon」が町を見下ろしている。西側は地中海に面する美しい海岸が広がっている。人口は１９７５年に約５万人であったものが現在は４０万人に近づこうとしている。文化、社会、人口統計学的発展に加えて観光名所としての港、商業・金融センター、レジャー・パーク関連の需要が継続的に拡大しつつある。

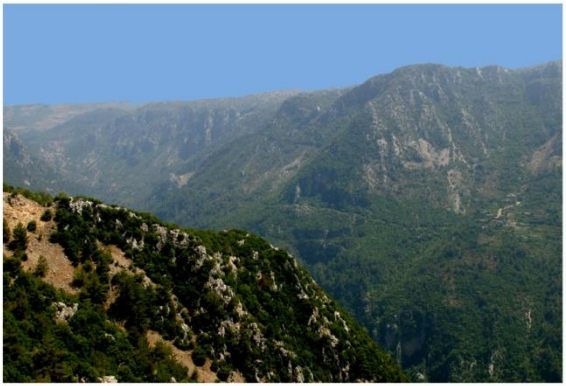
ジュニエとその郊外は、観光的にも、考古学的にも非常に興味深い場所となっている。マリア像が立つ標高６２０ｍのハリサ山の頂上には、ケーブル・カーで到達することができる。また１９９７年５月１０・１１日にローマ法王ヨハネ・パウロ２世が、レバノンを訪問したおり、ハリ－サのカテドラルでミサを行い若者達と平和の祈りを共にした。そこから眼下に拡がる絶景の海岸線とジュニエの町を見下ろすことができる。海辺で水上スキーが楽しめる。娯楽施設にも事欠くことはなく町やその郊外には、ビーチ、ホテル、レストラン、劇場、映画館、ナイトクラブ、スポーツ・クラブが多数存在している。

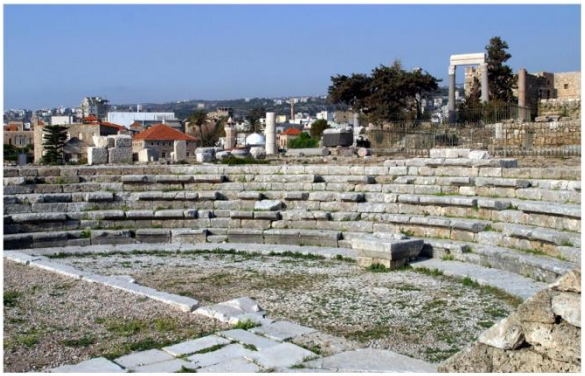
またジュニエ湾を見渡す海側の丘の上に位置する国営カジノ・ドゥ・リボンが１９９５年より再開した。　スロットマシーン等少額のギャンブルから本格的なブラック・ジャックやルーレットまで楽しめる。入場時にパスポートを持参すること。



ジュニエ近郊の名所

ジェイタ洞窟（Jeita Grotto）
犬の川の源流でもあるこの洞窟は、上下２層からなり、下の層は米国人宣教師ウィリアム・トムソンによって１８３６年に発見され、１９５８年公開、上層は１９６９年に公開された。上下あわせて全長６ｋｍ以上の奥行きがあり、その内上層を徒歩で下層６２３ｍの湖をボートに乗って見学できる。７０年代には戦争のため閉館されていたが修復され１９９５年夏より再開された時には、ラジオ・ジャパンでも広く報道された。１ｃｍに１００年かかるという鍾乳石がたいへん美しい。
　ベイルートより２０ｋｍジュニエへ向かいトンネル（犬の川）を抜けた直後、ズーク・ミカエル（Zouk Michael）村より右側に大きな看板がでている。





ビブロス

世界最古の町ビブロスで最も重要なものは、小さな港にそびえる丘の上にある、十字軍の城である。もとはエル(EL)神を奉った、はるかいにしえの時代に建てられた壁に、囲まれている。修復、再建を繰り返したこの城は、１８６０年にフランスの作家であり学者でもあるアーネスト・レナに再発見され１９２１年から１９２４年にエジプト学者のピエール・モンテによって発掘が始められ、ビブロスと古代エジプトの商業的関係が明らかにされた。後、１９２５年、モーリス・デュナンにより５０年に亘り、発掘がされた。ビブロスは、代々の移住者達が築き上げてきた１２メートルもの家々や庭に覆い隠されていた。発掘により１２、３層もの文明が見つかり、人々が７０００年以上にわたってこの１０ヘクタール土地に住んできたことが明らかになった。先史の時代最初にこの土地に住みついた人々は小さな漁師のコミュニティをもち、海を見下ろす西側斜面には、村の砕いた石灰岩をひいた単細胞型の小屋に住み、魚、穀物、少しばかりの家畜を食料にして生活していた。この石器時代の道具、武器などはよく発見されている。B.C.３５００年頃、新たな埋葬習慣が生まれ、死者は大きな陶器の壺に屈曲させて安置され、その中には現世での所有物が一緒に入れられた。人々は死後の世界を信じるに至ったのだ。穀物、青銅武器石製の矛先、宝石等が死後の生活のため死者の傍らに置かれた。巨大な銅製の埋葬地ともいえるビブロスは、１４５１個の埋葬壺が発見されている。現在ベイルート国立博物館に保管されているものの中に一つだけ犬が主人と一緒に埋葬されているものもある。紀元前３０００年迄には塚にぎっしりと家々が建ち並び、碁盤の目状に区切られていた。フェニキア人は、エジプトと木材やミイラの製造に必要な杉の油を、シリアとは黒檀を取引きし、キプロスから銅を買っていた。紀元前２１５０年頃、砂漠からの侵略者、遊牧民族　アモリ人によって破壊された。神殿の中には、破壊を免れたものもあったが形を変えられ、もとは、戦いの神、レシェフ(Reshef)を奉っていた神殿には、小さなオベリスクがいっぱいに建てられた。多くの奉納品が、地中から見つかっている。これらは、当時のビブロスの手工芸の美術的レベルの高さを物語っている。また、深く埋められた、王家の墓も、たくさん発見されている。

１８世紀にヒクソス人が侵略した時は、馬、投げ槍、槍といったヒクソスの見事な武具を取り入れ、またエジプトが力を持ち、支配するようになると、６００年間にわたり、安定した交流を続けた。フェニキア人は、エジプトの影響を取り入れ世界で最初に線書きのアルファベットを使い始めた。現在ベイルート国立博物館に保管されているアヒラム王の墓の柱には、「嘆きもがお前たちを待っている」と短いフェニキア人の呪いの言葉が、墓泥棒の侵略を予想して彫られていた。著述はもはや書記だけのものではなくなっていた。アッシリア時代には、不穏な状態が続き、紀元前５３９年、ペルシャのもとでバビロニアは、ほかに並ぶもののない繁栄をとげた。海岸沿いの都市はどんどん富を蓄え大きくなり、いくつかの田園地域がはじめて耕作された。バーラト(Baalat)神殿の重要な改築が行われたことが、壁に刻まれた碑文に、ヤハウ・マレク王によって記録されている。紀元前３３２年、ビブロスがアレキサンダー大王の前にひれ伏した後、この町は、ギリシャ神話のアドニス崇拝のセンターとなった。レシェフ神殿の上に、新たな神殿が建てられ、おそらくは染色業で使われた、染料を入れておくための穴が掘られた。政治的に不安定であったにもかかわらず、イタリア、エジプト、ギリシャとの交易が変わらぬ繁栄をもたらした。紀元前６３年に、ローマ人の手に支配権が移っても、この繁栄はとどまらず、フェニキア人の商いの場は帝国中へと広がった。ライン川流域、ダニューブ川流域、スペイン、イギリスは、フェニキアと関わりを持った。ビブロスの町は益々繁栄し、丘陵地帯まで広がった。通りには列柱が建てられ、像がつくられ、レシェフ神殿は改造された。キリスト教がローマの神々を一掃した後も、ビブロスは発展し続けた。紀元６３６年のアラブの征服によって、初めて、ビブロスの繁栄が中断された。１０９８年十字軍の手に落ちたが、彼らは、新しい交易のパターンをも作り出し、２００年にわたって、経済が発展した。その後、マムルークが、２００年間の不活発な時代を支配した。１５１６年から１９１８年まで、ビブロスを含む大シリアは、オスマントルコ帝国の一部として、コンスタンチノープルの支配を受けた。

ビブロスの遺跡

十字軍の城

遺跡めぐりは、城の頂上から始めるといい。ここからは、古代のビブロス、現在のジュベイル、港、海岸、丘等すべてを見ることができる。十字軍によって１２世紀に強硬な砦が建てられた。北側と西側には、平たく丸い石があり、これらは、ローマの円柱が３つに切られたもので、アラブ人が城を再建した時に、壁を繋げるのに使われた。内部で使われている石の多くも、ローマの神殿やペルシャ時代のものを使ったもので、長さ５メートル以上のものもある。

町の門

城の南東の橋に、雑草に覆われた階段があり、ヒクソス時代（紀元前１７２５～１５８０）に築かれた城壁の門の場所をしめしている。城壁そのものは、今でもこの地域にある大きな石でできている。

レシェフ神殿（Ｌ神殿）

部分的に再建ざれた戦いの神を奉った神殿。入口の裏に、聖なる池の一部だったと思われる勾配のある石の壁がある。洗礼のために使われた４つのテラコッタの水盤が置かれた石の台がある。この石のブロックは、以前に朽ち果てた木製の直立柱の土台だったものである。神殿はアモリの時代（紀元前２１５０）に焼き討ちされ、その後再建された。北東の部屋は、神殿の金細工師が使っていた。細工をする際に出た灰、石の鉄床、いくつかの廃棄された作品が、ここで見つかっている。

オベリスク神殿

この神殿は、最初はレシェフ神殿の上に建てられていたもので、考古学者によって再建されたものである。セム人の宗教では、石は、神の宿る場所だと考えられていた。祈願のため奉納されたオベリスクは１３０６本を越える。

王の泉(Ayn·el·Malic)

海へ向かう道は、女神イシスが、彼女の兄弟であり夫であるオシリスを捜しに最初に来た時、座ったとされる自然の泉に通じる。この井戸は、先史時代からビブロスの主な水源として利用されてきた。彼らは階段とバケツを使って水を汲んだ。ローマ人は、新鮮な山の水を好み、手の込んだパイプで水を運んできたが、ローマ人の造った水道は、彼らが去ってほどなく壊されてしまい、住民は再びこの井戸の水を使った。この井戸の水は、神聖なものとされた。

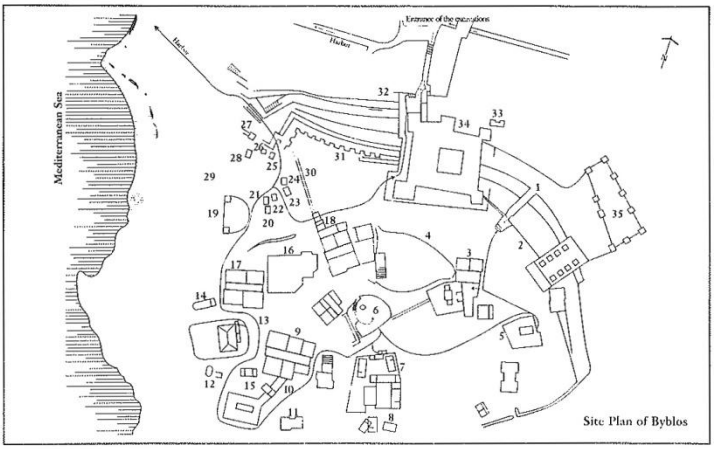
前都市時代
井戸の真南に、紀元前３２００年頃の家屋がある。またずっと南西には、新石器時代と青銅器時代の遺跡がある。壊れた大理石の床と低い壁の痕跡を見ることができるだろう。

バラアト・ジャバル（Balaat-Gebal）神殿
王の井戸の城側に、２世紀に渡って、ビブロスを統括したビブロスの女神、バラートを奉った、レシェフ神殿と対になる神殿がある。この神殿の基礎は、紀元前３０００年頃築かれた。またビブロスとエジプトの関係が密であった頃からローマ時代まで、増築、修復が続けられた。何人かのファラオが、高価なアラバスター製の壺を贈って、この女神を讃えている。象形文字で彼らの名前が書かれた破片が、神殿の中庭で見つかった。

ローマ劇場
この小さな半円形の劇場もまた、考古学者達によって移されたものであるが、海の眺めが素晴らしい。かつてはレシェフ神殿と南東の入口の間に置いていた。３世紀に建てられた時の劇場はもっと大きいもので、座席の三分の二が失われている。観客席は、天幕によって日ざしから守られていた。この幕は、座席の上にたれめぐらされていて、地面に埋められたポールによって支えられていた。ポールが埋められていた穴は、最前列の座席沿いに残っている。モザイクの床にある黒い小石は、国立博物館に保存されているモザイクのバッカスがあった場所を示している。

王家の墓
ローマの柱列と劇場の間に、B.C.２世紀の共同墓地がある。地下深くにつくられた穴の中に、９つの王の墓が発見された。考古学者達の前に盗掘者によって死者とともに埋葬されていたであろう品々の多くを奪われてしまったいたが、アヒラムの石棺（紀元前１２００年）に示されていた初期のアルファベットは大発見であった。この石棺は、国立博物館に移された。

ローマの柱列とフェニキアの家
３００年に、バラアト・ジャバル神殿に向かって北南に一直線に作られた柱列のある丘の高さは、次々と文明が築かれていき碁盤の目状のフェニキア人の居住地が、いかに深く埋められていたかを示している。



Ｍａｐ．ＢＹＢＬＯＳ

１．ＢＣ３世紀の市街門。２つの古代の石の城壁の間に開いている。ＢＣ２３００～１９００年のアモール人の侵略を想起させる火災の跡を見ることができる。

２．ビブロスで最古（ＢＣ２５００年前）の原始的防壁。

３．Ｌ神殿の基礎。ＢＣ２７００年に建てられ、その形より名前が作られた。アモール人の侵略（ＢＣ２３００～１９００年）の頃と思われる。火災による破壊の形跡が、献上の中庭の入口にある焼けて色の変わった石に見られる。清めの儀式の水のためと思われるテラコッタの水盆が、入口の裏にある石造りの台に付いている。

４．聖泉

５．オベリスクの神殿。Ｌ神殿上にあったものを考古学者が、現在の場所へ移動した。小さなオベリスクは、祈願のため奉納されたもので、金箔に覆われたブロンズの人形のものを含めて全部で１３０６個以上も発見されている。

６．“王の泉”（Ayn-el-Malik）。不揃いな石によって作られた大きな水槽があり、ビブロスの主な水源である。イシスとオシリスの神話の中で、イシスは、女王の侍従にここで会った。

７．前都市時代（ＢＣ３２００～３０００）の住居。障壁。

８．３つの家々の基礎。古いものは石器時代、新しいものは前都市時代（ＢＣ４世紀後半）のもので、少し南にある３つめの家には、７つの石の基礎に支えられた木の柱のある部屋が見られる。

９．初期青銅器時代（ＢＣ３世紀）の大きな家屋跡。それぞれが木の柱を支えた５つの石の柱の基礎が３列見られる部屋がある。

１０．初期青銅器時代（ＢＣ３世紀）の建物の基礎。

１１．アモール人征服時代（ＢＣ２１５０～２０００）の住宅の基礎。

１２．石器時代住居

１３．新石器時代住居

１４．前期新石器時代の文化的施設及び寺院。アブシダルの形をしている。

１５．前期新石器時代の文化的施設及び寺院。

㈱１２～１５はそれぞれ単細胞型の小屋で砕かれた石灰岩を床にしている。

１６．アモールの巨大石切り場。

１７．初期青銅器時代の家。海を正面とした厚い壁は彼等の建設の素晴らしさを顕著に表している。

１８・バーラット・ゲバル神殿（ＢＣ２７００）。２世紀に渡って、街を統轄した女神“Lady of Byblos”に捧げられた。エジプトと親密だった頃に建設され、何度か建て直され、ローマ時代にローマ様式建築にとって代わられるまで使われた。

１９．ローマ劇場。客席が５段しかないこの劇場はだいたいＡＤ２１８に建てられた。市街門（１）と、寺院（３と５）の間に元々は位置していたが、現在の場所に移された。モザイクの中心にある黒い小石は国立博物館に保存されている。

２０～２８．ＢＣ２世紀の王族の共同墓地。９つのビブロスの王達の地下墓も含まれる。アヒラムＥ（Ahiram）の石棺に刻まれた最も初期のフェニキアのアルファベットは最も重要であり、この石棺はベイルートの国立博物館の代表傑作として陳列されている。

２９．建設行程で捨てられた石材の破片が見られる空地。

３０．ローマ時代の列柱。バーラット・ゲバル神殿へ向かって、６本の柱が北南通り（ＡＤ３００）に並んでいる。

３１、３１．ＢＣ２～３世紀の城壁。ノコギリ状の壁は、３世紀の防御設備の特徴である。台状の斜面やGlacisは大きなブロックで作られヒクソク時代（ＢＣ１７２５～１５８０）に逆登る。

３３．妖精の寺院。噴水や彫刻、壁龕で飾られていた。寺院の前から美しい舗道が延びている。

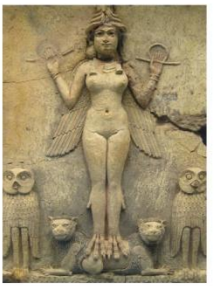
３４．十字軍の城。元々は要塞だったが、１２世紀の初め、十字軍がローマ時代の石造建造物と新しく切り出した石によって、強固な砦を建設した。主殿、中庭、壁から成り、４つの塔が角を防衛し、北側の真ん中に位置する５本目の塔が城門を守った。そしてその回りを堀が囲んでいた。マムルーク朝、オスマントルコ時代に再び城として使われ修復を受けている箇所もある。

３５．ペルシャ人の城

ビブロス近郊の遺跡

ビブロス近郊の丘には、カタコンベ（地下墓地）のある聖ノフラ（Mar Nohra)や聖シモン（Mar Samaan）教会といったとても古い教会が存在する。

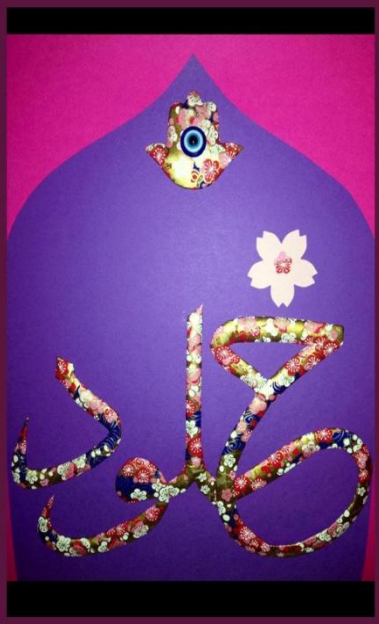
イブラヒーム川とアフカ（Afqa）の洞窟
ビブロスより南へ６Kmのイブラヒーム川は、古代アドニス川といわれ、その谷は自然がとても美しい。その上流にアフカの洞窟があり、その前にアフロディーテ（ビーナス）の神殿の遺跡がある。アドニス信仰は古代の死と再生の伝説に基ずいており、イシュタ（Ishta）とタンムズ（Tammuz）、イシスとオシリスのような東方の伝説とよく似ている。キリスト教が、異教徒の儀式を禁止する以前、地中海中のアドニス信仰者達が、アフカの洞窟に集まったものだった。彼らは追悼、そして８日間を祝った。アドニスは、この洞窟で春に猪に殺され、彼の血が水を赤く染めたといわれている。川は、洞窟から勢いよく流れだし、２００ｍの崖をまっすぐに落ちて海へと流れて行く。(Afqa とは、キスを意味するギリシャ語で、春の大地を目覚めを寓意的に表したものである）川の右側の道から簡単に洞窟に登って行ける。反対側には神殿の跡がある。



アムシット(Amchit)
フランスの作家アルネスト・レナンが１９世紀に暮らした家が伝統的な建築方法の美しい家々の中にある。またキャンプ場、ビーチも豊富な街。

ムセイルハ(Muscilha)の要塞
ベイルートからバトルゥーンへ向かう道から見ることのできるムセイルハの要塞は回りを切り取られたような大きな岩の上に建てられており、小さいながらも美しい城の一つである。おそらく、ローマ時代の砦の跡に、１６世紀に建てられたものだろう。

The perfect gift from Lebanon with a Japanese touch

We can customize any design to suit any occasion
We can design your name or the name of your loved ones in Arabic or any other language using Japanese traditional washi.

For further details, please contact the numbers shows below